
けいおん！ 男の娘の苦勞

yotto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ 男の娘の苦勞

【Nコード】

N2663T

【作者名】

yotto

【あらすじ】

平沢家の末っ子は憂ではなく男の…娘？主人公 平沢 類 は列記とした男の子だが…顔は平沢姉妹と瓜二つ！！それによって二人の姉のいたずらに困らせられることもしばしば… さらに軽音部員も加わり彼の周りはいつも騒ぎだらけ。そんな彼の苦惱、姉たちへの思い、過去、そして未来…いろいろなことが起こる、けいおん！の2次創作作品になっております。

5 / 20

追記；たくさんの方からの意見を参考にしまして、主人公の名前を、類から誅に変更させていただきまます。あと、変更のさいに見つけた本編でのミスも修正しました。ご意見ありがとうございました。

第0話 プロローグ（前書き）

どうも！作者のyoutte0です。

けいおん！のオリジナル主人公による2次創作作品です。

かなり先になりますが恋愛の要素も組み込んでいくつもりなので、
そういうのがムリだという方は読まないほうがいいかも知れません。

今回初投稿なので、文才のほうはもちろん、書き方とかもむちゃ
くちやかもしれません、どうかあたたかい目で見守ってやってく
ださい

第0話 プロローグ

「唯姉…それはなにかの冗談…だよね!？」

「ううん!大真面目です!！」

ぼくの名前は 平沢 誅
ひらさわ せうい
女の子みたいな名前だけど精一杯、男やってます。

「唯姉、一応聞いとくけど…僕が男つての忘れてない？」

「うん!誅はちゃんとした男の子だよ!」

そんな僕は、今…困難に直面していた。

「じゃあ…これはなんなの？」

「なにつて、私の制服だよ」

「で、これをどうしろと…?」

「これ着て、私の代わりに軽音部に行つてギター汰取つてきてほしいの」

「お分かりいただけただろうか」

「つまり唯姉は、僕に唯姉のふりして学校に行つて、唯姉の忘れ物を取つてきてほしいってこと?」

「その通りでございます！」

僕の上の姉である平沢 唯

いい姉だとは思っただが…人と少しずれてる気がするの僕だけなのか？？」

「…憂姉……！助けて……！！」

「あつ、待つてよ〜誄〜！」

「どうしたの類！？お姉ちゃん！誄になにしようとしたの？」

僕の下で、平沢 憂

優しくて頼りになる姉なのだが…

「ぶう！！誄に私の制服きてちよっとお出かけしてもらおうと思ってるだけだよ！」

「僕女装なんてやだよ〜憂姉なんとかしてよ〜><」

「誄…私も…ちよっと思てみたい……」

「ええ！？憂姉も！？」

「絶対かわいいよあ〜」

「うんうん！！誄〜、ちよっでいいから着てみよっ？」

「うん……」

僕はこの家について、ほんとに大丈夫なんだろうか…

第1話 望まない高校への道

「ここが…唯姉の高校か…」

僕、平沢 誅はまだ中学3年だ。

ほんとなら、高校に行くことになるのは
もうちよつと後のことになるのだが…

今は唯姉の忘れ物を取りに、唯姉の高校の前にいる。

「落ち着かない…なんかスウスウするなあ…」

唯姉の高校は来年から共学になる。

つまり…『今はまだ女子高』なのだ。

だから僕は…

「なんで僕がこんな目に…」

今は『女の子』になっている…

こうなったのは、今から30分前のことになるんだが…

「……………」

「……………」

「やっぱり…こうなるんだね…」

「かわいいいいいいい！！！」

「かわいいいいいよおお！！！！！」

唯姉と憂姉が同時に声をあげた。

さすが姉妹、息ぴったりだ

「よかったね誄。どこからどう見ても私だよ。」

唯姉は僕に向かって、親指を突き立ててきた。

「全然よくないんだけど……」

「誄かわいすぎるよお〜！！！」

そう言つて、憂姉が僕をギュッと抱きしめてきた。

これはこれで嬉しいんだけどなんか……

「なんかすごい複雑な気持ち……」

平沢家に生まれる子供は、全員顔がよく似ている。

似ているというか……髪型が同じなら見分けがつかない。

僕はそれが嫌で髪は短めにしていたのだが……

「さわちゃんにこれ借りといつてよかったよお〜」

なぜ、唯姉と同じ髪型のズラがある！！

そしてなぜ同じ髪型のズラを借りてきた！？

「ふふふ、いつかは誄に私の身代わりになってもらおうと思つていたのだよー！」

唯姉…あんたは鬼か…！？

「いつもいつもなんで女装なんだよ…！？普段は家の中だから我慢してるけど、

外に出るなんてやだよ…！」

そう、僕はことあるごとに、唯姉や憂姉の服を着せられた。時にはメイド服やら、女ものの浴衣などなど…
一体どこから持ってきてきているんだろうか？

「わがまま言わない！男の子でしょ…！」

いや、わがまま言ってるのは、あなたですよ唯姉…

「男はスカート履かないんだけど…」

そう言っつて、僕はスカートを指指した。

「誂〜おねが〜い…」

そういつて唯姉が目には涙を溜めてこつちをじっと見てくる…

その顔に、僕はとても弱い。

その顔は卑怯だよ…唯姉…

「誂、お姉ちゃんのお願ひ聞いてあげて？」

憂姉も、そう言いながら僕の方を見てくる。

「…わかったよ！今回だけだからね。」

僕は、二人の頼みを聞くしかなかった。

この時、結婚したら、僕は絶対に尻に敷かれるタイプだと確信した…

「「ありがと〜誅〜!!!」」

唯姉も憂姉もすごい笑顔だった。

姉だけどここういう顔見るとドキツとするんだよなあ…

「でも、唯姉の部の人にあったらどうすんのさ?」

そう唯姉に質問してみた。

「大丈夫!今日みんな予定あるって言ってたから部屋には誰もこないと思うよ」

唯姉:その言葉:信じてるからね!!

そして、僕は重たい腰をあげた。

「わかった…じゃあ行ってくる…」

「いってらっしゃい」

「気をつけてね」

—————

で、今に至るのだ。

「じゃあ、さくつと荷物取ってこよ。

誰かに見られたらまずいし…」

でも、これは僕がこれから目の当たりにする現実は、
地獄と言つのも生温い…そんな状況だった…

第1話 望まない高校への道（後書き）

無事1話も完成しましたが、自分でもいいのかよくわかりません…
>
<

感想など意見をいただける今後の展開の参考にさせていただくと思いますので、

よければなにか一言お願いします><

第2話 初めての出会いは『私』だった

「ここが軽音部の部室かあ」

唯姉に聞いてたおかげで部室の場所はすぐわかった。だけど…

「あれ…鍵かかってるなあ。」

当たり前か…今日土曜だし…
とりあえず、職員室に鍵を借りに行こう。

しかし、僕はこの学校の生徒じゃないわけで…
おまけに、唯姉の弟なわけで…
そんな僕の行き着く答えは…

「迷った…」

自然とこうなる。

こういう間の抜けたとこばかり、唯姉に似てるんだよなあ…

校内をふらふら歩いていると、

いつの間にか目の前に職員室があった。

「やっと見つけた…」

この格好、あんまり人に見られたくないけど、背に腹は変えられないな…

「失礼します」

「あら、唯ちゃん。お休みなのにどうしたの？」

顔立ちのいい若い女教師が、親しげに僕に声をかけてきた。

「部室に忘れ物しちゃってそれを取りに…」

僕は精一杯、唯姉の真似をした。

「あら？唯ちゃん風邪でもひいたの？いつもと声違っけど…」

この先生鋭い！

自分では結構似せてるつもりなんだけどなあ…

「じ…じつはそうなんですよぉ〜てへへ」

唯姉なら、きつとこんな感じだろう…

「そうなの？気をつけなさいよ」

「はあい」

なんとか誤魔化せたと僕は安心したのだが…

「でもねえ…なんかいつもの唯ちゃんと違うのよねえ…」

先生、あなたは間違っつていません。でもこの場は間違いで通して！！

そんなことを考えていると僕の後ろのドアが開き、見覚えのある人が職員室に入ってきた。

「失礼します…あら、…唯が休みに学校来るなんて珍しいわね」
このタイミングでくるなんて…運がいいのか悪いのか…

この人は、真鍋 和。唯姉の幼馴染の人で
唯姉や僕の面倒をよく見てくれる優しい人で
僕の苦勞の理解者でもある。

「あっ和さ…和ちゃんやつほ…」

「……唯…ちよつとこつちきなさい…」

「はい…」

そう言つて、和さんに腕を引つ張られ、僕は職員室を出た。
和さん…もしかして気づいてる…？

「はあ…誅！あなたなにやってるのよ！？」

さすが和さん、やっぱり気づいてた。

「違いますよ和さん！！僕はこんな趣味じゃないですよ！
これは唯姉の陰謀なんですよ！！」

「まあ…あなたのことはよく知ってるから自分から
こつこつことしなれないとは思ってたけど…そんな格好でなにしてきた
の？」

そういつて和はまじまじと類を見ていた。

和さん…そんなに見ないで？

お願いだからみないで！？

「はい…実は…」

そして、いままでのことを全部和さんに話した。

「なるほどね…わかったわ…私が先生に言っつて、鍵借りてきてあげるから、

あんたはここでじっとしてなさい！！わかった？」

「わかりました…すみません迷惑かけて…」

「はあ…あんた男だったら

いやなことははつきり断りなさいよ。」

そう言っつと、和さんは別の教室に入っつていっつた。

すみません…努力します…

そして、和さんのおかげで部室の鍵は借りられた。

部室に入っつて唯姉のギターを見っつけ、それを抱えようとした時…

「あれ？唯、来てたのかよ。起きてたならメールくらい返せよな」

知らない女の子が僕に話しかけてきた。

話かけてきた？

これは夢？

夢であっつてお願い！！

恐る恐る振り返ると、前髪をカチューシャでアップにした女の子が僕を見ながら唯姉の名前を呼んでいた。

「う…うん。ギター忘れたからそれとりに…」

多分ばれてない…

「どうしたんだ律？あつ唯も来てたのか。偶然だな」

そう言っつて扉の影から黒髪の女の子が顔を出した。

その時、僕の中でなにか大事なものが崩れていく音がした…

「うん…ぐ…偶然だね…ははは…」

平然を装っつてなんとか誤魔化したが、その後…

「あら？澁ちゃん達も来てたんだ 偶然つてあるのね」

見るともう1人、女の子が部室の前まで来ていた。

とどめの一撃！無理っす！！自分もう限界ッス！！

「お！おっすムギ〜！！」

「偶然だな」

楽しげに話している僕の目の前の人たちに、

「み…みんな…予定あつたんじゃない…」

僕が唯姉の真似しながら質問してみると、

「ああ早めに終わつたからちょっと練習しようかなと思つてお」

「私は律に誘われて…」

と、カチューシャの子と黒髪の子が言った。

唯姉…軽音部って…ちゃんと練習してるみたいだよ…

「私はさつき唯ちゃん見かけたから付いてきちゃった」

そしてこの子は、僕を見かけたから付いてきたと言う。
よりによってなんで今なの!?

という心の声は

青い空に静かに消えていった。

この人達が、唯姉の部活仲間みたいだけど…

「せっかくだからみんなでちょっと合わせて帰らないか?」

と、カチューシャの子の一言。

「そうだな。ライブ終わってからあまり練習してなかったもんな」

さらに、黒髪の子も続き、

「賛成!ねっ唯ちゃん?」

もう一人の子が僕ににっこり笑いかけた。

…なにこの3連コンボ?

「わ…私ちよつと憂ね…憂に買い物頼まれてて…」

そう言っつて誤魔化して帰ろうとしたが、

「そう言わずにさ！1曲だけ！！なっ？」

とカチューシャの子に引き止められ、

「唯、せつかくだから一緒にやろう」

黒髪の女の人が僕の肩に手を置いてきた。

一体なんなんだ！この状況は！？

でも、和さんとの話にもあったけど、

僕はNO！と言える人間ではないわけで、結局…

「わかった…1曲だけなら…」

折れてしまった…

「よしきた！！じゃあやろうぜえ！」

ああ…神様…これから僕はどっなってしまうのですか？

第3話 利き腕の苦勞そして…

「よし！澁、ムギ、準備しろー！」

カチューシャの子が一言。

澁さんとムギさんの名前呼んでるし、この人が律さんかな？

「私は準備OKよ」

キーボードの前の子も準備できたらしい。

「私もいいぞ」

ベースを構えながら黒髪の子は声をかけていた。

ムギさんはおつとりした人って唯姉言ってたから、

キーボードの人がムギさんで、

ベースの人が澁さんかな？

軽音部のメンバーをさらつと見た時に感じた違和感
それは、澁さんだった。

『あつ…澁さんって左利きなんだ…』

この危機的な状況で、こんなことを考えていた。

今まで左利きの構えを見たことなかったから、
ついついまじまじ見てしまいその結果…

「…唯？どうしたんだ？」

墓穴…掘っちゃいました

「う…ううん！？なんでもないよ…え…えへへ」
「??？」

なんとか誤魔化せたみたいでほっとした。
次からは気をつけないと…

さて、なぜ僕が演奏の誘いを受けたのか？
それは、唯姉に教えてもらってたおかげでギターは人並みには弾けるからだ。

多分、唯姉くらいには…

1曲合わせたら帰れる。

すぐ終わらせて帰ろうと思ひ、
ギターを構えたのだが…

「唯…お前寝ぼけてるのか？」

「えっ!？」

構えただけでバレた!？

「はあ…お前はいつから左利きになったんだ？」

「あっそうだった…」

そう、僕は両利きなんだ。

ギターもどちらでも弾けるが、弾く時は左で弾くことが多い。
自分のギターも左利き用だ。

もともと唯姉にギターを教えてもらっていたのだが、
右利きでの弾き方はなんかしっくりこなくて…

独学で左利きの弾き方を勉強したのが始まり。

それが…今回裏目にでてしまった…

「ふざけてないでさっさとやるぞ」

律さんが一声かけた

唯姉…律さんやる気マンマンだよ…

練習嫌いなんじゃないの!?

「いくぞ! 1、2、3、4…」

—————

そして、軽く流す程度に演奏は終わったんだが…

「唯…お前どうしたんだ!？」

「えっ!？」

律さんがこっちに来る

「そっだ! 唯、なにがあつたんだ!？」

「ええっ!？」

湊さんもこっちに来る

「そっよ唯ちゃん! なにがあつたの!？」

「ええええ!？」

ムギサンマデコツチニキタ

「どうしたの…みんな?？」
『もしかして…バレた!!』

「」「あきらかにうまくなってる!!」「」

「…へ?」

三人の声揃い、意外なこと言っていた。

唯姉って…僕より下手だったんだ…

「いつの間にこんなにうまくなったんだよ!」

「唯…ちゃんと練習してたんだな!」

「唯ちゃんはやればできると思ってたわ」

律さんに背中を叩かれ、澪さんに肩に手をおかれ、ムギさんに両手を握られ…

とにかくもみくちゃにされた

「そ…そんな〜大げさだよ〜」

と言いながら、僕は頭をかくフリをしてズラを抑えた。

「よし!もう1曲いこうかー!」

律さんのその一言は、僕をさらに追い詰めた

「わ…私はもう無理だよ〜」

これ以上はもう隠せそうにない!

「唯〜お願いっ!もう1曲!~!」

さすがにこれ以上はやばい…

「律！唯は買い物があるんだ！

きつと憂ちゃんだって待ってるんだからあんまり無理を言つな」
「湊さんのこの一言に、僕は救われた。」

ありがとう！湊さん>><

「ごめんねりっちゃん…」

そう言つて、僕は帰り支度を始めた。

「ちえ〜わかつたよ…じゃあまたな唯」

「また学校でな」

「唯ちゃん、またね〜」

口ぐちにみんなが別れの言葉をかけてくる。

「うん。みんなバイバイ」

今さらながら、唯姉の話し方はすごく疲れる…

でもこれでなに〜こともなく家に帰れる

そう思いギターを抱えて部屋から出ようとした時…

「もう！誅遅いよお〜！」

―その声の主は、今の僕と『同じ』だった―

…唯姉、どうしてきちゃったの…？

その光景を目の当たりにした、3人の反応は言うまでもない…

「なっ…」

「ええ！？」

「まあ…？」

「…あれっ？」

「…唯が二人い…！？」

「…え…えへへえ…」

笑ってごまかせ…ないよねえ…

第4話 ネットばらし

「それじゃ…説明してくれ！」

律さんが僕と唯姉の前に仁王立ちしている。
僕らは正座させられていた。

「りっちゃん…これには深い訳があつてですね…」

唯姉がゆっくり話し始めたのだが
若干くい気味に律さんが、

「とりあえずこいつはだれなんだ！？名前は？唯の家族か？」
かなり動揺している。

それはそつだ。目の前で自分の友達が1人から2人に増えたのだ。
この状況は、だれでも同様すると思う。

「ええとねえ、この子は私の家族で名前は誂っていうの！かわいい
でしょ？」

この状況でも、唯姉は唯姉だった。
唯姉、それ説明になつてないから…

このままでは埒が明かないと思い、僕が説明しようと思つた時、

「なんだ〜そつだったのか〜」

と、律さんは納得していた。

「そうなのか？でも少しびっくりしたぞ唯」

そう言っつて遷さんはこっちに近づいてきた。

「でも、ほんとによく似てるわねえ」

と、ムギさんもこっちに…

「こっつやっつて見ると唯と瓜二つだな…」

「ほんとだな。誅ちゃんつて言っつのか」

「かわいい名前ね。どこから見ても唯ちゃんと思分けがつかないわ」

口々にそう言っつてみんなが顔を近づけてくる。

「てか唯、お前憂ちゃんの下にまだ妹いたのな。

弟の話はよく聞くけど」

と、不思議そうに聞いた律さんに唯姉は一言こつ言っつた。

「誅は妹じゃないよ〜」

その場の空気は固まり、軽音部員3人は目を丸くして、互いを見詰め合っつていた。

「」「」「えっ？」「」

その一言に、3人は固まっつていた。

すると唯姉は、こっつ付け足した。

「いつも話して居る弟が、誅のことだよ！」

3人が僕を見ている。

「あの…唯姉の弟の…誅です…」

「」「」……「」「」

「すみません…これでも…男なんです…」

「」「ええ——————！……！」

その時の3人の顔は忘れられないだろう…

ムギさんは目を輝かせていて、

律さんは放心状態、

そして澪さんは、顔を真っ赤にして部屋の隅のほうに走っていった。

第5話 『僕』と『私』

その日の帰りは質問攻めで疲れた…

思い出すのも嫌なので、掻い摘んで説明すると、

律さん、ムギさんは僕に興味が沸いたのか、

僕のことをいろいろ聞いてきたのだが、

澪さんはこつちを1度見たきり、

なにも言わずに下を向いていた。

そんな感じだ。

唯姉が来なければ、こんなことにはならなかったのに…

そんなみなさんの質問の中に、

高校はどこにするかもう決めてるのか？

という内容があったが、

唯姉の話によると、桜が丘高校は来年から共学になるらしい。

憂姉は最初からそこを目指していたんだけど、

共学の話聞いた時から、

「誅も桜が丘受けようよ」

と盛り上がっており、

うちの両親も、

「同じ高校だとなにかと都合がいいからそつちにしなさい」

と言ってきた。

取り立てて夢があるわけでもなく、
希望する高校もなかった訳で、
受けてみてもいいかとも思っていたのだが、
実際のところ、

「大丈夫！唯も受かったんだからな」

という父さんの一言全てが決まった。
調子いいな、僕って…

そして、時は流れ4月…

僕は桜が丘高校の前にいる。

前とは違う、

『私』じゃなくて、『僕』として…

第6話 出会い

新しい学校生活…中学から高校へ…

大抵の人は、新たな生活に、希望を馳せているはずだ。

でも僕は、唯姉のおかげで、

そんな希望は抱けなかった…

登校初日に『前』と同じ格好で行こう言い出した唯姉

そんなことをしたら、高校生活1日目から、

女装趣味の変態男子のレッテルを貼られ、

僕の高校生活は地獄と化すだろう。

その時の僕の顔は、自分で思っている以上に酷かったらしく、

唯姉は静かに、

「…ごめん」

と、一言だけ言った。

しかし、1度言っただけ引き下がるような唯姉じゃない。

これから毎日、あんなやり取りがあるかもと考えただけで憂鬱に…

「誅、クラス分け早く見に行こうよ」

憂姉のその一言で現実に引き返され、

僕たちは見に行った。

「…見えないね」
「うん…」

到着が少し遅くなったせいで、
掲示板の前は人ばかり。
後ろからは、なにも見えなかった。

「じゃあ僕見てくるから、憂姉はここで待っててよ」
「うん！じゃあお願いね」

そう言っつて、僕は人ごみの中に入った。

クラス分けの結果、僕と憂姉は同じクラスだった。
確認して、元の場所に戻ってみると、
憂姉は、見知らぬ女の子と話していた。

「憂姉、見てきたよ。その子は？」

「あつ誄！この子、中野 梓ちゃん。さっきお友達になったの」
「始めまして、中野 梓です。憂ちゃん、この人が弟さん？」

どうやら、僕の話はもう話にでてたようだ。

「どうも、弟の誄です。よろしく」

「よろしく。私、双子の人って始めてみたけど、
やっぱりすごく似てるんだね」

中野さんが僕と憂姉を見ながらそう言った。

「「よく言われる」の」

僕と憂姉は同時にそう言った。

こういう時に、やっぱり双子なんだと、しみじみ思う。

「息もぴったりだね。あつ、私もクラス分け見てこないと…」

「ああ、中野さんも同じ2組だったよ」

上から順番に名前を見ていたおかげで、中野さんが見に行く手間が省けた。

「そうなんだ！じゃあ一緒にクラスなんだね」

憂姉は嬉しそうだ。

「改めてよろしくね、中野さん」

「うん、よろしく。憂ちゃん、誅くん」

これが、高校生活、最初の出会いだった…

第7話 きっかけ

入学してしばらくたち、学校は活気だっていた。そう、部活への勧誘である。

さまざまな部活の勧誘活動で、校内はごったがえしていた。

「なあ誅、お前もう入る部活とか決めたのか？」

僕に話しかけてくるのは、同じクラスでの唯一の男子生徒、一之瀬誠。
成績よし、顔よし、なのに女の子が苦手で、話しかけることもできない典型的ヘタレである。

持ってるもの持ってるものなだけに、残念な奴だ…

「僕は決めてあるけど、誠には部活無理だろ？」

「ん？なんでだ？」

「いいか、この学校は去年まで女子高だったんだ。つまり先輩は女の人ばかり。そんなところに、お前は飛び込んでいけるのか？」

「無理だ！」

返答が恐ろしく早い！！
ほんとに苦手なんだろう…

「…素朴な疑問なんだけど、
なんで誠はこの高校選んだの…？」

「こういう自分を変えたくて選んだんだけど…
こんなにも男子の数が少ないとは思わなかった…」

自分を変えようとする努力は評価するけど、
ハードルが高かったな…

「まあがんばれ…あつ、僕は軽音部入ろうかと思ってる
んだけど、誠も一緒に入る」

今さらだが、軽音部員は4人
新入部員獲得のために、いろいろ協力を頼まれていた

「うーん…楽器できないわけじゃないけど、あまり興味
ないからなあ…まあ一応考えとくよ」

「うん。じゃあ僕、ちよつと軽音部の人探してくるから」
「おう！じゃあまた明日な」

そういつて誠とは別れたのだが、女子ばかりのこの学校から
あいつは1人で無事家に帰ることはできるんだろうか…

「さて、唯姉たちを探すか」

唯姉から大体どのあたりで勧誘をするかは聞いていた。
とりあえず、僕はその場所に行ってみることにした。

そして、来たはいいもの…

その場所には、なぜか犬、猫、鶏、馬の着ぐるみ4体が
部員勧誘をしていた。

周りにいた生徒は、若干…いや、かなり引き気味に僕は見えた…

なにを目指してるんだ、あの人たちは…

そんなことを思いその場に立ち尽くしていると…
鶏が僕の方に向かって走ってきた。

「誅—————!!」

この鶏、間違いない…

「…唯姉、なにやってんの…?」

「なについて、部員勧誘だよ!インパクト大でしょ」

いや、唯姉…インパクト強すぎるから…

「見た目は絶対軽音部じゃないと思うよ」

「ええ〜そっかな?」

いや、だって…ねえ?

「それより、早く戻らないと。

部員勧誘してるんでしょ?」

「あっそっか〜忘れてた〜 じゃあ誅、またね〜」

なんだか、唯姉が少し可哀想な人に見えてきたよ…

唯姉の後ろ姿越しに、見覚えのある女の子が、馬の人から紙を受け取っていた。

「あ、誂くんも部活選び？」

僕に気づいた中野さんが、声をかけながらこっちに来た。

「うん、まあそんなとこ。中野さんは入りたい部とか決まってるの？」

「うん、まあ軽音部かジャズ研かどっちかとは思ってるんだけど…あの人達、ほんとに軽音部なのかな…？」

「うん…うちの姉ちゃんいたから、間違いないと思うよ…」

残念なことに、そうなんです…

「へえ〜誂くんって、もう1人お姉ちゃんいるんだね」

「そうなんだ…姉とは思えないほど抜けてるんだけどね…」

「そうなの？でもお姉さんいるって憧れるな…私一人っ子だから」
「そんないいもんじゃないよ。というか中野さん軽音部かジャズ研ってことは

なにか楽器やってるの？」

「うん！ギターをやってるよ。あんまりうまくないんだけどね」

同い年の友達に楽器をやってる人があまりいなかったこともあってか、

僕はうれしくてテンションが上がっていた。

「そうなんだ！僕もギターやってるんだ 僕もあんまりうまくない

「んだけどね」

「そうなの！？ 誂くんがギターしてるなんて以外！」

「まあ姉とかの影響もあってね」

「そうなんだ！ ねえ？ 今度ギター聞かせてよ」

「うん、僕の中野さんのギター聞いてみたいな」

「いいよ 今度一緒に演奏しよう」

普段はあまり話す方じゃないけど、

この時は自分でもびっくりするくらい

中野さんと話してたと思う。

「あつ、じゃあジャズ研一緒に見にいかない？ 一人で行くのも、なにか心細くって…」

「うん、いいよ。じゃあ行こうか？」

「うん」

この時、後ろからなにか視線を感じたのは、僕の気のせいであってほしい。

そうして、中野さんとジャズ研の部活を見に行った。

「失礼しました」

ジャズ研の部室を出て、僕は中野さんに聞いてみた。

「ジャズ研どうだった？」

「うん…本物のジャズって言うのとは、少し違ったかな…」

「そうなんだ。僕ジャズとかあんまり聞かないからよくわからなかつたけど…」

「うん…まあ少しだけだけどね…」

そんな話をしていると、階段の前で中野さんの足が止まった。

手にはさつきもらつていた紙…

その紙は軽音部のポスターだった。

「…ちよつと覗いてみる？」

僕がそう中野さんに聞いてみると、

「うん…でもあの着ぐるみの人たちでしょ？」

御もつともな意見です。

「まあ少しだけだから、もしかしたら演奏してるかもしれないし」

唯姉に言われた手前、一応勧誘の手伝いを思つて誘つてみた。

「まあ…少しだけなら…」

そういう中野さんと一緒に

部室に続く階段を上がって行った。

踊り場のあたりで音が聞こえてきた。

部室の扉の窓から、すこしだけ中を覗くと、

軽音メンバーが演奏を始めていた。

しかし…なぜジャージ？

その向こうには、見慣れた人が立っていた。

「あつ憂姉」

「ほんとだ、憂ちゃんだ」

そこにいた憂姉の顔は、

誰がどう見ても困った表情をしていた。

「なんか…困ってるね」

「うん、大体予想はつくけど…」

なんとか新入部員をと思い、誘ってみたのだが…

「…真面目にやってる部じゃないのかな…」

逆効果でした。

「どうかな？あつ明日軽音部のライブあるみたいだから

一緒に聞いてみない？ライブだと、イメージ違うかもしれないし
？」

「…なんかさ、誅くん私を

軽音部に入部させようとしてない？」

ギクッ！

ここで正直に言ったら絶対入部してくれない…

そう思った僕は、

「い、いや…そういうわけじゃないけど…

僕、軽音部に入部しようかなって思ってた…

それで中野さんも一緒だったら楽しくなるんじゃないかなって思っ

て…」

なんとか誤魔化してみた。

「そ…そうなんだ／＼」

「う…うん…」

「…入部するかはわからないけど、
ライブは…聞いて…みようかな…」

「そ、そっか…それはよかった…」

「うん…／＼」

この時、彼女の頬が少し赤くなったのは、
僕の気のせいだったのだろうか…

第8話 音色

次の日の放課後、

「ごめん、遅くなって！」

中野さんは掃除やらなにやらで時間を食ってしまったのか、軽音部のライブ開始時間には間に合わなかった。

「うん、気にしなくていいよ。」

誘ったの僕のほうだし」

「でも誅くん、最初から聞きたかったんじゃない？」

中野さんが申し訳なさそうに聞いてくる。

「大丈夫、1曲目は前にも聞いたことある曲だから」

「そっか、ならちよっと安心」

「うん、じゃあ行こうか？」

「そっだね」

部活動の発表は、講堂で行われている。

僕と中野さんが講堂に入った時、

ちよつど1曲目の演奏が終わったところだった。

「おっ、結構入ってるね」

「うん…ふうん…」

ステージに立つ軽音部はいつもと雰囲気の違い、

様になっていた。

そんな姿を見た中野さんも、
思わず言葉が漏れていた。

『へえ、今日のボーカル、唯姉なんだ…』

そんなことを思っていると、

唯姉のMCが始まったのだが…

「どうも、け…」

フオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!

いきなりハウった!!

「…っと、軽音部です!」

…唯姉、大丈夫かな??

「ええと…新生生の皆さん、ご入学おめでとつございます!」

うん、ここまでは順調、

だったんだが…

「私、最初軽音部って聞いて、軽〜い音楽だと
思ってたんですよ」

ズコーーーーーー!!!

なにを言い出すかと思えば…

さすが、唯姉…

見に来ている生徒にはウケていたが、僕の隣にいる子は、文字どおり、ポカンッ としていた。

「それで、カスタネットができればなあゝなんて、軽い気持ちで入部しました」

カスタネット使ってる軽音部なんて僕は見たことない…

「なので皆さんもそんな感じで、気軽に入部してください」

いや、気軽すぎるでしょ？
むしろ、唯姉なら本気でカスタネット教えそう
僕は心配です…

そして、ドラムの律さんが構えた。そろそろ演奏が始まるなと思ったが、

「あつても〜」

唯姉、まだ続きあんの!?

「カスタネットは実は難しいって、さわちゃん先生が言っていました」

どうでもいいわーーーーー!!!

「では次の曲…」

やっとかと思いき、メンバーを見ていると律さんは明らかに呆れた表情をしていた。ちなみに、ぼくの隣の子も、同じような表情をしていた。

「あつさわちゃんって言うのは…」

まだあんのかよー！

そんな中、律さんのドラムが唯姉のMCに割り込み…

「コミックバンドかー！」
と、一言。

まったくその通りだ。

「じゃあ次の曲、わたしの恋はホッチキスー！」

そして、軽音部の演奏が始まった。

この曲は聞いたことなかったが、ギターをやったたおかげか出だしのリフは

かなり難しいというのはわかった。

でも、唯姉はそれを完璧に弾きこなしていた。唯姉もやる時にはやるなっと思ったのだが…

『あの顔は…さては歌詞が頭から飛んだな…』

すると、澪さんが歌い出しをカバ―
唯姉、放心状態。

やっぱり、唯姉は唯姉だ…

しかし、最初のミス以外は順調で、

僕は軽音部の演奏を心地よく聞いていた。

『やっぱり…ライブでの軽音部はかっこいいな!!』

中野さんは気に入ってくれたかな?』

そう思いながら中野さんに目をやると、

必死に背伸びをしている中野さんがそこにいた。

その時の中野さんは、

なんか…かわいかった…//

「…ほい、中野さんはこっちでいいかな?」

「うん…ありがとう誂くん」

ライブも終わり、帰り道の近くの公園に

僕と中野さんはいた。

中野さんにオレンジジュースを渡し、

僕はコーヒーを飲みながら、

今日のライブの余韻に浸っていた。

「…すごかったね、軽音部の演奏…」

「うん…ちよつと…感動した…」

飲みかけのコーヒーをベンチに置いて

中野さんに語りかける。

「…僕の姉ちゃん…あのボーカルなんだ」

「うん…なんとなくだけど、わかった」

「すみません、うちの姉、あんなんで…」

「正直、唯姉のMC聞いてた時の中野さん見てて、
軽音部には入らないだろうなと思っちゃったよ…」

「まあね…カスタネットって…あれは…ねえ？」

「ですよねえ…」

「でも…」

「ん？」

「演奏は…すごかった…」

「だよ…」

「多分、僕が演奏しても、あの音は出せないよ…」

「私も…そう思った…」

それほどまでに、軽音部の演奏はすごかったんだ…

「…少し、昔話をしようか…」

「…どうしたの？急に？」

「まあまあ…」

僕は音楽に出会う前…

そして、軽音部のメンバーに出会う前の唯姉の話をした。

「うちの姉ちゃん、高校入るまでは、
学校でも家でもなにもしない、
ただボーっと生きてるだけの毎日だったんだ」

「あつ…でもなんとなくわかるかも」

「はは…でも高校に入って、ギターに出会って…
姉ちゃんは変わったんだ」

「……………」

「毎日毎日ギターの練習して、指の皮が何度も剥けて…
それでも練習してたんだ」

「うん…」

「普通の姉ちゃんなら…辛いことや努力することなんかは
すぐやめるのに…ギターはやめなかった…」

「うん…」

「それくらいギターが好きで…楽しくて…
それと同じくらいに…今の軽音部が好きで、楽しかったんだと
思う」

「なんとなくわかるな…その気持ち…」

「うん…そんな姉ちゃん見てるとき…音楽って
人をこんなに変えるものなんだなって思ったのが、
僕がギターを始めようと思ったきっかけ、そして高校に入ったら
軽音部に入るうつつで思ったきっかけなんだ。」

「そうなんだ…誂くん…なんだかんだ言って、お姉さんのこと、

「好きなんだね」

「…まあね。」

ぼくは、話を続ける。

「もつとも、その時はうちの高校、共学じゃなかったから、あの軽音部には入れなかったんだけどね…」

「でも…今なら入れるね」

「うん…だからさ…中野さんも入部すれば、

あのメンバーと一緒に演奏すれば、

あんないい音…出せるかもしれないんだ！だから…」

「うん…私も…そんな気がする！」

「じゃあ…」

「…一緒にがんばろっか？ 誂くん」

次の日、軽音部の扉を、二人が叩くことになった…

第9話 入部

「じゃあ中野さん、僕先に行ってるから」

「うん、じゃあ誂くん、あとでね」

中野さんは今日も掃除当番

なんでも忙しい友達の当番を代わってあげたそうだ。
大変そうだな…

そして、僕は先に軽音部の部室に行った。

「こんにちは〜」

部室の扉を開けると…

軽音部室は、喫茶店と化していた…

「いらっしや…なんだ誂か…」

「なんだ…はないでしょ唯姉…」

さすがに、僕も少し悲しいよ…

「おう、誂か、久しぶりだな！」

「誂くん、お久しぶり。」

「誂か、いらっしやい。」

あの一件以来、ほかの軽音部の方とも仲良くしてもらい、
澪さんも、僕と普通に会話できるようになっていた。

「で、なんの用だ？お菓子ならやらないぞ」

律さん…僕は唯姉とは違います…

「いや、とりあえずこれを持ってきたんですけど…」

そう言って、出したのは入部届。

しかし、そうとは知らず律さんが…

「遷、誅がお前にラブレター持ってきたそうだ」

なにを言ってるんだ、この人は！！

「ええ！！る、誅…その…」

こういうの…困る…」

「…律さん、ちゃんと中見てから言ってくださいよ」

「わあたわあた！悪い悪い…ええと…入部届…」

「なんだ入部届か」

「入部届ですね」

「あっほんとだ〜入部届だ」

「「「「「……………」」」」」」

「「「「入部届！！！！」」」」」

すごい反応だな…

「誄！お菓子なに食べる！？」

「紅茶もあるわよ！」

律さん、ムギさんのその速さは

音速でさえも軽く超えそうな勢いだった。

「誄なら入ってくれと、私信じてたよ！！」

「…唯姉には今朝言つといたでしょ？」

「あれえ？そだっけ？」

僕はあなたの老後がすごく不安になりました…

「でも以外だな。私はあの一件があるから、
てつきり入ってくれないものだと思っていた」

澪さんの意見はもつともだった。

「最初は迷ってましたよ。顧問の先生の話聞いて…

またあんな格好させられるかもと思うと…」

唯姉から、顧問の先生の話は聞いていた。

なんでも、人にコスプレを強要する

変態教師という話…

「…心中察するよ…誄」

「そして、よく決意してくれた…」

澪さん、律さんが肩に手を置いた

僕、どうなるんだろ…

「でも、みなさんの新歓ライブ聞いて、
こないバインドとライブしたいなって思って…」

「いやあゝ それほどでも」

うん、唯姉は少し謙遜しようか？

「それで、一緒にライブ見てた子も
軽音部に入部したいらしくて…」

「『『『なに！？』『』『』」

わあ息ぴったり！

「でかした誅！お菓子好きなだけ食べていいぞ！」
「紅茶のおかわりはいかが？？」

いや、そんな物もらいたくてやったわけじゃ
ないんだけど…

「で、どんな子なんだ！？」

湊さんも少し興奮してるな

「もうすぐ来ると思っんですけど…」

ガチャ…

部室の扉が開いた。

「失礼しまーす…」

「「ようこそ！ー！軽音部へ！ー！」」

変わり身はええ…

「ほら、こっちこっち」

そういつて中野さんの手を引っ張る唯姉。

「お名前はなんていうの？」

ムギさんも食いついてる…

まあ新入部員期待してたし、しかたないか…

「あつ…中野です…」

「パートはなにやってんの！？」

「あつ…ええ…」

「好きな食べ物は何？」

質問攻めの合つ中野さん。

唯姉、ちよつとズレてるよ…

「落ち着け、お前ら…」

湊さんの一言でその場は落ち着いた。

「えっと…1年2組の中野 梓といます。
パートはギターを少し…」

「おつ2組ってことはクラスは誅と一緒にだな」
「あとパートがギターっていうのも一緒にだな」

「これは…もしかして…運命!？」

「唯姉、僕の後ろでなに言ってるの？」

「ギターは唯姉も一緒にじゃん!」
「僕がそう言つと、」

「よろしくおねがいます、唯先輩!」

と、中野さんが唯姉にお辞儀した。

「唯先輩…先輩!…先輩!」

『『おい…帰ってこい』』

僕と律さんは、心でそう思っていただろう。

そして、遠い所から帰還なされた唯姉が、

「じゃあ、なんか弾いて見せて」

と、自分のギターを中野さんに渡した。

「まだ初心者なんで下手ですが…」

そんなことを言いながら、中野さんはギターを構えた。

「…あぁっいやっそういうわけじゃ…」
すかさず澁さんがフオロする。
しかし…

「まつ…まだまだねっ！」

と唯姉が一言。

唯姉、声、裏返ってるよ。

唯姉はまだ見栄を張っていた。

ほんと、子供だなあ…

しかしその言葉に、中野さんの顔はパツと笑顔になり、

「私、もう1度唯先輩のギターが聞きたいです！」
と一言。

唯姉、後輩がここまで言ってるんだから、

もちろん弾くよね？期待、裏切らないよね？

「ああ…ええ…はっ！ライブでギックリ腰になったから、
また今度ね…」

逃げたーーーーー！！

苦しい…

みなさんも、きっとそう思ってると思う。

「そういえば、誅。お前だけの演奏
今まで聞いたとこなかったな。」

「そういえばそうだな。」

律さんと漣さんに言われて、僕もそう思った。

「よし誄！お前も弾いてみる」

「そうだな。聞かせてくれ、誄」

「私も聞いてみたいわ」

「誄！お姉ちゃんも久しぶりに聞きたいよ」

「私も、誄くんの演奏聞いてみたい」

僕以外のメンバーがそう言った。

これは断れる流れではないと思い、

「わかりました、ちょっと待ってくださいね」

と言って自分のギターを持って構えた。

「ん？誄、お前レフティなのか!？」

と漣さんが聞いてきた。

心なしか目が輝いているような…

「そっぴや、前にそんな素振りしてたな」

「えっ、前って？」

そっぴか、中野さんは知らなかったね

「前に1度だけ、部のみなさんと合わせたことがあるんだよ」
と、中野さんに説明した。

「でも、あの時は右で弾いてたじゃん？」

「ああ、僕両方いけるんですよ。」

でも全開でできるのはこっちのほうで…」

溇さんの言いたいことは、なんとなくわかった…

「はい…ぼくも持ってるんです…絶対音感…」

「「「「「……………」」」」」

「「「「うそ—————!!!」」」」

4人のテンションだだ上がりである。

残る1人は、のん気にお菓子を食べていた。

その後、先輩がたにもみくちやにされ、

絶対音感は遺伝する!!

など、わけのわからない話にもなり、

ゴタゴタしたまま僕と中野さんは帰ることになった。

第10話 名前と距離

「誅くん、ギターすごくうまかったんだね」

「そんなことないよ、僕なんか全然…」

学校からの帰り道、中野さんから少し話そうと誘われ、僕たちは、この前の公園に来ていた。

「私よりはうまいよ ねえ、自分で曲作ったりはしないの？」

「うん…もともと唯姉の弾してる真似から入っちゃったからなにかお手本がないとうまく弾けないんだ…」

「そっか、なんか勿体無いね…」

「中野さんは、自分で作曲とかはしないの？」

「うん…曲らしい曲は作ったことないかなあ…」

「そっか、まあお互いがんばろうよ！」

すぐには無理でも、いつかきつといい曲作れると思うよ。中野さんなら」

「ふふつ、お世辞でも嬉しいかな。

がんばろうね、誅くん」

夕日を背に微笑む中野さんの顔に、少しドキっとした。

「そういえば、唯先輩の演奏聞けなかったけど、やっぱり誅くんくらいうまいの?」

「うん…どうだろ?唯姉、調子いい時と悪い時の差、激しいから…」
「あつ、それなんかわかる」

「でも、ライブ前とか集中してる時とかは、確実に僕よりうまいよ。」
「そうなんだ」

「あとねえ…」
「うんうん…」

どれくらい話してただろう。
気が付くと、辺りは暗くなり始めていた。

「よし!じゃあそろそろ帰ろっか?」
「そうだね。」
「近くまで送ってくよ。」

「大丈夫。うち、もうそこだから」
「そっか…じゃあまた明日ね」
「うん…あつ、待って!」

帰ろうとしたその時だった。

「誄くん、私のこと、下の名前で呼んでほしいんだけど…だめかな？」

「えっ？どうしたの急に？」

「だって、誄くん…先輩たちのことは名前で呼んでるし、私だけ苗字で呼ばれると、なんか変な距離感感じちゃって…」

「考えてみれば…そうかもね。」

「じゃあ中野さんも僕のこと、君付けなくていいよ。僕も…梓って呼ぶから…」

「うん…わかった…／／／」

今思えば…

「じゃあ…また明日、梓／／／」

これが、

「うん、また明日。誄…／／／」

予兆だったのかもしれない。

僕の中で起こる変化の…

第11話 ひとり

いつもと同じ放課後、普段ならすぐに部活に行くんだが、

「誂、部活行こう」

「ごめん、梓。僕今日は

ちよつと先約あるから少し遅くなる…」

「そつか…じゃあ、先行って待ってるからちゃんと来てよ？」

「うん、じゃあまた後でね」

僕は憂姉から話があるから残ってくれ。

と言われていた。

「で憂姉、話ってなに？」

「誂ってさ…梓ちゃんと

付き合ってるの？」

僕は、飲みかけのお茶を吹きそうになった。

「っんぶ！？いきなりなんだよ！？」

「だって、あんまり仲よさそうだから…

呼ぶときだって梓って呼んでるし」

「それは、梓がバンドメンバーで

自分だけ苗字で呼ばれてるの気にしてたから、直したただけだって」

「でも、類最近梓ちゃんにベツタリだし」

「そんなことないって!?!…てか

用事ってそれだけ?ならもう僕いくよ?」

「あつ、用事っていうのは、今日は友達の家にお泊りすることになったから、

ご飯はお姉ちゃんとなんか買って食べてって伝えようと思って」

「それ別に残っていうことなくない?」

「最近誅、お姉ちゃん達とばかりいるから少し寂しくなっちゃって…」

そう言って、憂姉は抱きついてきた。

まったく、うちの姉は世話がかかる。

「はいはい、わかったわかった。

まあ唯姉にも一応伝えておくよ」

「うん、お願いね。じゃあ誅、部活がんばってね」

「うん、憂姉も気をつけてね」

しかし、他の人から見ると、僕と梓は付き合ってるように見えるのかな?

そんなことを考えていると、少し恥ずかしくなってきた。

うつ、今日まともに梓の顔：見えないかも

そして、部室のほうへ足を向け、
階段を上がっているんだが、

「そんなんじゃないんですー！ー！！」
静寂に包まれた階段に、
聞き覚えのある彷徨。

『梓：なにがあつたんだ??』
おもむろに部室の扉を開けると、

「みなさんやる気が感じられないです！ー！！」
そこには…

「あ…いや…新歓終わった後だったし」
「そんなの関係ありません！音楽室を私物化するのもよくないと思います。」

ティーセットは全部撤去すべきです！」

「それだけは勘弁して…」
「なんで先生が言うんですか！ー！！」

「まあ…落ち着いて…」
「これが落ち着いていられますか！ー！！」

荒れ狂う梓がいた。

「あのくなにがあつたんですか？」
「…誅！？いつからいたの！？」

「ええと…やる気がないとかそういう話のことから…」
「……………／／／」

僕の声に驚いてか、梓は落ち着き、
少し小さくなっていた。

「ねえ唯姉、なにがあったのさ？」
「こつなつたのはね…」

話の流れを簡単に整理すると、

- 1、梓が部室に来る
- 2、いつものティータイムが始まる
- 3、先生登場
- 4、梓がギターを弾く
- 5、先生が激怒
- 6、お茶は飲むが練習はしない
というものだった。

「それは、先輩達が悪いと思います。」

「……………やっぱり…?」「……………」

「うう……誂までひどうい……」

梓は音楽にすごく真面目な子だ。
この部に入部しようか悩んでた時から、
それは薄々わかっていた。

「でも、梓も怒鳴っちゃだめだよ。
みなさんもびっくりしてるよ?」

「うん…みなさん、取り乱してすみませんでした。」

「ううん、全然気にしてないから」

「唯姉…気にしよう?」

「うっ…ごめんなさい…」

とりあえず僕は、唯姉を黙らせた。

「でも、梓と誄の考えも一理あるよ」

澪さん、あなたならわかってくれると思ってました!

「私達ももつとやる気だしていかないと!」

わかりましたね!?

「「「はい…」」」

「ところで唯ちゃん、この子はだれなの?」

僕を指差すその先生とは、
初対面ではなかった。

「あっこの子が前話した私の弟だよ。さわちゃん。」

「どうも…誄です。これからよろしくお願いします。」

「そう…この子があの時の…」

あの時のってなに!?

もしかして、唯姉話したの!?

そして、その先生は、
僕を上から下まで見回した後、

「…いい素材ね。」

その一言で全てがわかった。

この人だ…コスプレ強制する先生って…

「文化祭が楽しみね…ふふ」
もう着せる気マンマンじゃねえか…!

「まあそんなに気を落とすな…誅。」

「その気持ちわかるぞ…誅…」

律さんと澪さんの一言が、
心に染みだ

「誅ならなんでも似合うよお」

「私もそう思うわ」

唯姉、ムギさん…あんたらは鬼だ…!

「なんの話？」

「梓は知らなくていいんだ…」

僕は、心の中で泣いた…

そんなこんなで時間も過ぎて、
気が付けばもう6時過ぎ。

僕らは、今日は解散することになった。

そして家への帰り道、今日は唯姉と二人で帰った。

「そういえば唯姉、憂姉が今日泊まりにいらしいから、ご飯適当に買って食べてって言ってたよ。」

「あれ？誂に言ってなかったっけ？」

「??？」

「私も、今日は和ちゃんのとこにお泊り行くことになってるんだよ。」

「そうだったんだ、じゃあ僕一人で適当に食べとくから気にしないでいいよ。」

「うん…ごめんね。じゃあ私、家に荷物置いたらすぐ行くから。」

「うん、わかった。」

唯姉も泊まりということと、今日はうちに1人だ。今のうちに、練習しとくか…』あれ』

第12話 涙

「さてと、今日どうするかな…」

私服に着替えた僕は、商店街にいた。
目的は夕食の買出しだ。

「特にすることもないし、適当になんか作るか…」

憂姉の手伝いをちよくちよくしているおかげで
料理は人並みには作れた。

とりあえず、一通りの材料を買いにスーパーに入ると、
梓がお弁当とにらめっこしていた。

「梓、なにやってんの？」

私服の梓は、
いつもと少し、雰囲気は違っていた。

「あつ誂。ちよつと晩御飯買いにね

今日お父さんもお母さんも夜勤でいないから…」

「そうなんだ、自分で料理つくらないの？」

「なんか、めんどくさくてね。類は？」

「僕も今日唯姉も憂姉も家にいないんだ。

それで、なんか簡単なもの作ろうと思って

その材料買いに。」

「へえ類も料理作れるんだ。いつもボオ〜としてるから、料理は全部、憂に任せてるんだと思ってた。」

僕は教室ではボケっとしてることが多い

朝は眠気が残って眠いし、

昼休み後はお腹いっぱい眠い。

朝も弱いから、弁当はいつも

憂姉が作ったものだ。

まあできないと思われてもしかたない生活だな…

「人並みにはできるよ。あつ弁当買うくらいならさ、

僕の家来てご飯食べない？梓の分も作るよ。」

「ええ！？でも…いきなり家で二人なんて…／＼／

「??？」

梓の顔は真っ赤になっていた。

なんでだろ？僕なんか変なこと言ったかな？

「あつ迷惑ならいいんだ。ただ…滅多に

一人でご飯食べないからなんか寂しくてさ。」

いつもは唯姉も憂姉もいるからなあ〜

「迷惑なんかじゃないよ！？でも…いいの？

お邪魔しちゃっても？」

「うん 梓が大丈夫ならおいだよ。」

「じゃあ…お邪魔しちゃうかな…／＼／」

ということで、梓がうちに遊びにくることになった。

「どうぞ〜」

「お邪魔します…」

玄関は綺麗好きの憂姉のおかげで、いつもきれいだ

「誂の家って広いんだね〜」

たしかにうちは広い

家族5人で住むにはちょうどいくらいの家。

その家に普段は3人、それに今は2人しかいない
せいか、いつもより家が広く感じた。

「確かにちよつと広いかもね。人がいなかったら特に」

「でもなんかわかる。家族がいないと妙に広く感じちゃうよね。」

「そうそう。でも僕は大体、部屋の角とかにいるんだけどね」

「ははっ、なんか誂らしい」

「じゃあ適当にくつろいで。パパつと作っちゃうから。」

「うん ありがとう」

今思えば、僕が家に友達を連れてくるなんて

初めてかもしれない。

小さいころはいつも唯姉たちと遊んでたし、

小、中学校のころは

唯姉たちの友達と遊ぶほうが多かった。
友達と遊ぶにしても外で遊んだり
家に遊びに行くことばかりだった。

うちの姉ちゃん達は昔からあれだからなあ…
年頃の男心というやつだったのかもしれない。

そんなことを考えながらサクッと
料理を終わらせた。

今日の献立は、
豆腐と若布の味噌汁
出し巻き卵
赤魚の煮付け
この3品だった

「ごめんね、質素だけど」
「そんなことないよ おいしそう…ありがとね、誂」

その時の梓の笑顔に
一瞬クラっときたのは
秘密である。

「じゃあ食べようか」
「うん。じゃあ…」

「いただきます！」

ご飯を食べながら、唯姉や類姉のこと、
それに軽音部のこと。

いろいろ話したけど、
梓の顔は、少し苦しそうに見えた。

「「「ごちそうさまー!」」」

僕は食器をシンクにつけて、梓の前に座った。

「で、梓はなに悩んでんの?」

「ええ?悩みなんてないよ...?」

僕は、この容姿のせいで一時期いじめにあっていたことがある。

その時の反動か、人の顔色を見分けることが、知らず知らずに得意になっていた。

「軽音部のことじゃない?」

「!?! 誄: なんでもわかるんだね...」

「まあ人の顔色気にする性質だからね...

でも、言いにくいなら無理に話さなくてもいいよ。」

「わからなくなって...」

「どうして軽音部に入ろうと思ったのか?」

「うん...今までのいろんな人の演奏や、いろんなバンドの演奏聞いてきたけど...」

「うん」

「技術的な面では断然外バンのほうがうまい...だけど...」

「うん」

「この前の軽音部のライブは、他のどのバンドより感動したの…」
「うん」

「だから…軽音部に入ろう…一緒にいれば…
その理由がわかるかもしれないって思った…」
「うん」

「でも、練習まったくしないし、お茶してばかりだし…
一緒にいる意味…あるのかなって…」

梓は、目に涙を溜めながら、そう言った。

「梓は真面目だからね…まだ日は浅いけど、
辛かったんだね。」

僕は、優しく、梓の頭を撫でた。

ガバツ

「梓!?!」

「ごめん…泣いてる顔…見られたくない…」

「うん…」

「…私どうしたらいいかわからない!!一緒にいて答えを見つけた
いけど…」

「このままじゃ、私絶対だめになる…わからない…わからないの!
!?!?!」

梓は僕の胸の中で
大粒の涙を流し
泣きじゃくった…

第13話 それぞれの思い 誅視点

「…落ち着いた？」

「…うん、ごめんね…」

思い切り泣いたせいか、
梓は目を真っ赤にして
ぐったりしていた。

「…昔、澪さんに聞いたことがあるんだ。」

「澪さんに？」

「うん、なんで澪さんは軽音部でバンドしてるんですか？
澪さんなら、他のバンドでも通用するんじゃないですか？
他のバンドなら唯姉に世話やくことないの？って」

「うん…」

「そしたら、澪さんは迷いなくこう言ったんだ」

「…」

「それは私は、このメンバーとバンドできるから楽しくて、
きっとそれはみんなも同じだからいい演奏になるんだと
思ってた」

「…!」

「その言葉を聞いて、唯姉がギター続けてる理由、
それに、あの軽音部があんなにいい演奏している理由、

少しだけだけどわかった気がするんだ。」

「うん…」

「梓も、なんとなくわかった？」

「うん…なんとなくだけど…」

「きつと、ああいうお茶する時間も大事なんだと思うよ。
やりすぎも注意だけだね」

「うん。そうだね」

僕ら二人は

小さく笑った

「どう？もう少しみんなと一緒にいてみる？」

「…うん…そうしてみる。」

「そっか」

そして、梓は、

「あの……／＼／」

「ん？」

「誄…ありがと／＼／」

満面の笑みを見せてくれた。

「そうだ、梓。まだ時間大丈夫？」

「うん、あと少しくらいなら。」

「じゃあちよっと待ってて。」

「なにをするの?」

「梓のために、1曲ね」

そういつて、僕は父さんの部屋に向かった。

「じゃあ父さん、ちょっと借りるね。」

—————

「お待たせ」

「誄、アコギも持ってたんだ。」

持ってきたのは父さんのアコギ
かなり古いものだが、
大事に使っているおかげで
状態はそこまで悪くない。

「これは、父さんのギターなんだ」

「へえ、お父さんの…」

そういつて、梓は僕の隣に腰掛けた。

「うん、じゃあいくね」

「うん、お願い」

:

く

く

く???

く???

く???

僕の弾いた曲は、
思い出の曲、

僕ら家族の曲

「いい曲だね…」

「うん、思い出の曲なんだ。」

そうやって、しばらく弾いて
曲の終盤、

もうすこしで終わるころに、

フワッ

「梓？」

「…すう…すう…」

きつと泣いて疲れたのだろう。
幸せそうな寝顔だ
起こすの悪いから、
寝かせといてあげよう…

「おやすみ、梓…」

そっと、梓の髪を撫でた…

「…誂ただいま〜誰かきて…ふふっ」

…パシヤ！！

目が覚めると、梓は帰っていた。

帰ってきていた憂姉に聞いてみると、
憂姉が帰ってきた後すぐ目を覚ましたらしく、
慌てて帰って行ったらしい。

起こしてくれればよかったのに…

そして、おもむろに携帯を開いてみると

僕と梓

二人が寄りかかりながら眠っている写真が
待ち受け画像になっていた…

第13話 それぞれの思い 梓視点

こんなに泣いたのはいつ以来だろ？

一人で泣くことはあった。

でも、他の人の前でこんなに泣いたのは生まれて初めてかもしれない。

「…落ち着いた？」

優しい声が聞こえる。

「…うん…ごめんね…」

思い切り泣いちゃったから、きつと目も腫れてる…

誅には見られたくないな…

「…昔、漣さんに聞いたことがあるんだ。」

「漣さんに？」

なにを聞いたんだらう？

「うん、なんで漣さんは軽音部でバンドしてるんですか？

漣さんなら、他のバンドでも通用するんじゃないですか？

他のバンドなら唯姉に世話やくことないのにな？って」

誅も、私と同じこと考えてたことあったんだ。

「うん…」

「そしたら、漣さんは迷いなくこう言ったんだ」

「…」

「それは私は、このメンバーとバンドでできるから楽しくて、きっとそれはみんなも同じだからいい演奏になるんだと思うって」

「!?!」

単純な答えだった。

「楽しい」って気持ち。

今まで、一番大事なことを忘れてた気がする

「その言葉を聞いて、唯姉がギター続けてる理由、それに、あの軽音部があんなにいい演奏している理由、少しだけだけどわかった気がするんだ。」

「うん…」

技術も大事だけど…

一番大事なのは心なんだ…

「梓も、なんとなくわかった？」

「うん…なんとなくだけ…」

「きつと、ああいうお茶する時間も大事なんだと思うよ。やりすぎも注意だけだね」

「うん。そうだね」

自分の探してたものが
こんなに近くにあったなんて
とてもおかしくて
笑ってしまった。

「どう？もう少しみんなと一緒にいてみる？」
「…うん…そうしてみる。」

そうすれば、必ず取り戻せる。
音楽にとって、一番大切なものを…

「そっか」

それに気づかせてくれた軽音部の先輩方…
それと…

「あの……／＼／」

「ん？」

「誄…ありがと／＼／」

その時の私は、
今まで最高の笑顔だっただろう。

「そうだ、梓。まだ時間大丈夫？」

「うん、あと少しくらいなら。」

「じゃあちよっと待ってて。」

「なにするの？」

「梓のために、1曲ね」

「すぐく…ドキドキした…」

「私のために…誄が…／／／

「なんだろう、

「すぐく、幸せな気分…」

—————

「お待たせ」

「誄、アコギも持ってたんだ。」

「すぐく年季の入ったギターだった。」

「でも綺麗…」

「きっと大事にされてきたんだろな…」

「これは、父さんのギターなんだ」

「へえ、お父さんの…」

「なんだか今は、

「誄の傍に、

「少しでもいたかった。」

「だから私は、

「誄の隣に座った。」

「うん、じゃあいくね」

「うん、お願い」

：

く

く

く？く？

く？く？

く？

なんだろう…

なんだかとっても暖かくて、
優しい曲…

「いい曲だね…」

「うん、思い出の曲なんだ。」

やっぱり、類はギターうまいよ。
聞いててすごく落ち着くもん…

なんだか…気持ちよくなってきた…
ちよっとくらいなら…いい…よね…

少し遠くのほうで、

誄の声が聞こえた気がした。

「うん…」

「あっごめん、起こしちゃった？」

目が覚めると、目の前に憂がいた。

「そっか…私、寝ちゃったんだ。」

「気持ちよさそうに寝てたよ あっ朝ごはん食べる？
誄に買ってきたんだけど、起きそうにないから…」

「ふふっ、確かに起きそうにないね。」

「じゃあ、ちょっとだけもらおうかな」
「うん、ちょっと待っててね」

そして、憂のパンを「ご馳走になつてると、

「ねえ、梓ちゃん」

「どうしたの憂？」

「誂のこと…好き？」

「…好き…だよ／＼」

以外と素直に言えた。

いつからだったのかな…

私、類のこと…好きだったんだ…

「やっぱり」

「憂、わかってたんだ。」

「なんとなくだよ。」

「そっか」

やっぱり、この家族には勝てないや。

「でも、誂かなり鈍感だから、

振り向かせるの大変だよ？」

「それは、なんとなくだけどわかってた。」

「ふふつ、梓ちゃん…がんばってね」

「…うん／＼」

朝食も食べ終えて、

憂は洗濯物を干している。

ほんと、憂はすごいよ…

「憂ー！私もうそろそろ帰るよ」

「もう帰えっちゃうの？」

「うん、そろそろお母さん帰ってくるから、それまでに帰らないと…」

「わかった、誂には帰った伝えておくよ。」

「ごめん、お願いね。」

私は、誂の寝顔を少し覗いた。

「すう…すう…」

「悩みだけじゃなくて…私の気持ちにも…早く気づいてね…」

チユツ…

なんか今日は、いいこと...あるかも

第14話 夏休み突入

あれから何ヶ月が過ぎ、
季節は夏。

僕たちは夏休み中だった。

「おゝい」

「あつ！梓ちゃん」

「お、来た来た」

「ごめん、待った？」

「ううん、今来たところ」

「ならよかった」

今日は憂姉、梓と3人で遊びにきていた。

グウ

「…お腹へった／＼」

「ふふ、誂は相変わらずだね」

「朝ごはん食べてなかったもんね」

「うん…とりあえず、なんか食べない？」

「賛成 実は私もお腹ぺこぺこ」

「じゃあ、そうしよっか」

いきなりかつこ悪いところを見せてしまった…でも、お腹がへってるからしよっかがない。

そして、僕らは近くのファーストフード店に入ることにした。

「あつ、今度軽音部で合宿行くんだよね？」

「うん、三泊四日だつて。誂は最後までごねてたけど…」

「しよっかがないじゃん！だつて、女の子に囲まれて

合宿なんて、男としてホイホイ行っではいけない気がして…」

「そう？部活の合宿だから気にしなくていいんじゃない？」

「誂は女の子みたいなものだから、大丈夫だよ」

「うっ…憂姉、それ地味に傷つく…」

「ふふっ、でもいいなあ合宿。お姉ちゃんもすごく楽しかったって言ってたし」

「楽しかった？」

去年、合宿の準備をしている唯姉をみたが、部活の合宿に行くというより、

学校の友達と旅行に行くような装備だった。

「…あつ！それって練習が充実してたってことかな？」
「えっ！？…うん、そうだと思う…」

憂姉もそれを見るからなあ…
こんなに期待して目を輝かせている子に、
そんな残酷なこと…言えない…

「そつか…みなさんあんない演奏する先輩だもんね。合宿くらいは…」

そう言った梓の顔は、期待半分、不安半分といった
表情だった。
それくらいのほうがいいだろう。
じゃないと絶望してしまう…

「お姉ちゃん、軽音部でどんな感じ？誅、全然教えてくれなくて…」
「だって唯姉いつも通りだし…まあ教えてあげなよ。あずにゃん」
「ぶうー！」

いきなりそう言われたびっくりしたのか、
梓は飲んでいたオレンジジュースを
吹き出した。

「冷たい…」

「誅がへんなこと言うからだよ!！」

怒りながら、梓はハンカチを渡してくれた。

「梓ちゃんのこと、お姉ちゃんそう呼んでるんだ。私もそう呼ぼうかな…」

「憂までやめてよ!! 恥ずかしいじゃん… / / /」

そう言つて、頬を赤らめる梓。

先輩たちがいじりたがる気持ちは

少しだけわかった気がした。

「ごめん、で、お姉ちゃんはどう?」

憂姉ほんとに唯姉のこと、好きだよなあ…

「うん…全然練習しないし、あだ名で呼んでくるし、
やたらスキンシップしてくるし…」

今聞いた内容で、いいところは1つもない気がした。
すいません、うちの姉が…

「お姉ちゃんって、あったかくて気持ちいいよね」

「いや、そういう話じゃなくて…」

憂姉には、いいところのように聞こえたようだ。
憂姉、相変わらずだな…

「そついえば、今日唯先輩はなにしてるの？」
「家にいるよ。お姉ちゃん熱いの苦手だから。あと冷房も嫌いだし」
「だれてる姿が目には浮かぶ…」

唯姉、後輩にここまで言われちゃってるよ…

「最近是一日中、ぐったりしてる…僕もあんまり人のこと言えないけどね…」

「はあ、二人ともだらしないわね」
「でも、ゴロゴロしてるお姉ちゃん、かわいいよお」

「…誅、憂っていつもこんな感じなの？」
「うん…僕もたまに憂姉がわからなくなる時がある…」
「そっか…」

多分、僕と梓の感覚が近いのだろう。
というより、憂姉の感覚が
他の人とずれてるのだろう…

「私、滲先輩みたいなお姉ちゃんだったらほしいな。」

「澪さん、優しくて格好いいもんね。」

「僕、初めて梓見た時、澪さんの妹かと思ったよ。なんとなく似てるし。」

「私も思った。髪下ろしたら似てると思うよ。」

「そうかな？自分ではわかんないや。」

そんな他愛もない話をしてると、梓の後ろに、見たことのある人が座っていた。

『あれ？もしかして、律さんじゃないか？』

僕がそんなことを考えていると、

「律さんは？」

「うーん…あの人はいい加減で大雑把だから、パス…かな。」

梓がとんでもないこと言っていた。

梓、後ろに本人いるよ…

とりあえず、僕は、

「梓、今持つてるジュース、机に置いといた方がいいと思うよ…」

「へ？なんで？」

「ほお〜誰が大雑把だって…？」

「うわああああ!!」

その時、梓の持っていたジュースが、半分以上床に零れたのは言うまでもない。

「こんにちは、律さん。」

「どうもです、律さん。」

「やつほ〜。外から見えたから来ちゃった」

軽く挨拶を交わしている僕らの前で、梓は首を軽く絞められながら、ごめんなさいと呪文のように唱えていた。

「今日は一人なんですか？」

憂姉がそう尋ねると、

「うん、澪は夏期講習行ってるよ
そう答えた。

「律先輩は行かなくていいんですか？」
涙ながらに梓が尋ねる。

「私が？夏期講習？なんで？」

そう言って手を離れた律さん。
梓は開放されてホッとしてるようだ。

「「ですよね」

僕と梓は同じことを思っていたようだ。

「あつところで、ずっと気になってたんですけど……」
「うん？」

「ムギ先輩って、自前のティーセット持ってきたり、
別荘持ってた……もしかして、すごいお嬢様なんですか？」
「あつ、僕もそれ気になってました。」

「そうだぞ！家には執事さんがいて、長期休暇には、外国行ったり
してるんだぞ！！」
「「本当ですか！？」」

びっくりするのも当然だ。
そんなもの、漫画の世界だと
僕は思っていた。

「だったら面白いよね」

僕は勢いよく、机に頭をぶつけた。

「知らないんじゃないですか……」

冷静に梓が一言

「じゃあ、今からムギに電話して、ムギんち遊びにいこうぜ〜」
「いいんですか？そんないきなり…」

僕もそう思ったが、律さんの性格を考えると
止めても無駄だと思い
なにも言わなかった。

「あれ？携帯にでないな…家電にかけてみるか…」
そう言いながら、律さんは携帯のダイヤルを
押していた。

「…あつ、もしもし、紬さんのお父さんですか？」
どうやら繋がったようだ。
繋がったんだが、目の前にいる二人は
明らかに動揺していた。

「えっええと、紬さんはいらっしやいますかしら？」
「先輩、落ち着いて。」

律さん…言葉使い変になってますよ。

電話から漏れる声を聞いてみると、
電話に出てるのはムギさんの家の執事さんで、
ムギさんは、今は外国に旅行に行っているから
家にはいない。
ということだった。

「ほ…ほらみる。私の言った通りだろっ？」

「「「おお」」」

ムギさん、やっぱりお嬢様だったんだ…

そして、することもなくなってきたので、
僕らは店をでることにした。

「はあ…なんか疲れた…」

「うち寄っていきます？スイカありますけど」

元々買い物やらを済ましたら、僕らの家に
梓が来ることになっていた。

でも、目の前のへろへろの律さんを見ると、
もう家に行ったほうがいいんじゃないかと
思っただけ声をかけた。

「行く!!!」

この辺は唯姉と一緒に扱いやすいな…

—————

「ただいま〜お姉ちゃん。律さんと梓ちゃんがきたよ〜」

「唯姉ただいま〜」

「お邪魔します…」

「スイカ〜」

4人が並んでリビングに入り、

全員が同じところを見た。
それは、

「お〜か〜え〜り〜」

扇風機の前でうちわを仰ぎながら

大の字に寝転がっている

唯姉の姿だった…

『なんかホツとするな』

『聞いてた通りだ…』

『やっぱりお姉ちゃん、かわいいなあ』

『家出た時からいる場所一緒だ…』

みんなそれぞれ別のことを考えていたが、

憂姉の考えていることだけは、

正確に当てれる気がした。

そして次の日、軽音部女子メンバーで合宿のための
買い物に出掛けたらしいが、

唯姉が僕にビキニタイプの水着を買ってきたのは、

また別のお話…

第15話 合宿 昼の部

「「「「「おおー!」「」「」」」」」

そして合宿当日、

僕らはムギさんの別荘の前にいた。

「こりやまた一段とすげえな…」

「めっちゃくちゃでかい…」

ムギさんの別荘は

初めて合宿に参加した僕と梓はもちろん、

前に参加していたみなさんも

驚くほどのかさだった。

「これが、去年言ってた借りれなかった別荘だね」

「ごめんなさい。その別荘は、今年もだめだったの。

多少狭いと思うけど、我慢してね?」

「「「「まだ上があるのか!?」「」「」」」」

ムギさん、あなたは一体なにものなんだ…

とりあえず、僕らは部屋に荷物を置きに行った。
唯姉や律さんは、僕も同じ部屋で寝ても構わないと言っていたが、
さすがにその部屋で寝る勇氣はなかった。
僕は、ムギさんに頼んで別の部屋を用意してもらった。

ある程度荷物を整理して、玄関に戻ってみると、

「よし」

「あつそぶぞおー」

「お〜う!」

水着姿で勢いよく飛び出していく
唯姉と律さんがいた。

「こら!遊ぶのは練習してから!」
漣さんの一喝

「ちえ」

「遊びたあい!」

駄々をこねる唯姉と律さん。
子供じゃないんだから…

「それじゃあ多数決にしよう。私は練習が先。」

「遊ぶ!!!」

「私は練習がいいです。」

遊びたい唯姉と律さん、
練習が先という澁さんと梓
そしてその後ろには、

「遊びたいです」
水着姿のムギさんがいた。

「じゃあ先に遊びましょうか。」

「誂、お前もか…」

「誂、信じてたのに…」

「だって、言っただけで聞くような人たちじゃないでしょ？特に唯姉は…」

「…たしかに。」

ここで僕が練習と言っただけでも、唯姉はきつと
遊びに走っていたらどう…

しばらく準備をする二人を待ち、

僕らは海に向かった。

「ねえ誅、私思ったんだけど…」

「ん？」

「ムギ先輩の遊びって、もしかしておつきい船でクルージングとかないよね…？」

「それは考えすぎじゃないかな？ねえ、漣さん？」

「あ、ああ…さすがにそこまでは…ないと思う…」

前の合宿で同じようなことがあったのだろう。

漣さんは自信なさそうにそう言った。

そして、ふいに海に目をやると、

いかにもという一隻の船が…

そしてビーチには、リゾートホテルに置いてあるようなパラソルやフルーツといった小物。

「いらないうって言うておいたでしょ！！浜辺にあるものもすぐに片付けて！」

「お船もいらないう！！」

「ムギ…」

「先輩…」

「ムギさん…」

お金持ちには、お金持ちの悩みがあるようだ…

それから、僕以外の5人は海を満喫したようだ。

僕はというと、日差しが気持ちよかったこともあってか、浜辺に着いてすぐに、寝てしまっていたらしい。

「…誄、起きて！誄ってば！！」

「…ああ、おはよう………ってだれ？」

寝起きでぼけているせいもあつたのだろ。

そこには、日焼けで真っ黒になった梓がいたのだが気が付かなかった。

「私だよ、私」

「ああ！梓か、焼けたねえ〜もしかして、一番遊んでたんじゃない？」

「そ、そんなことないもん！」

「最初は練習しようって言ってたくせに……」

「うっ…ちゃんと練習もするもん！！」

「じゃあ一晩中？」

「うう…するもん！！」

むきになっっている梓は、少しかわいかった。

その時律さんは、なぜか僕に向かって

親指をたてていた。

そして僕らは遊びを切り上げて、
練習することになった。

スタジオのある別荘なんてあるんだなあと
僕は考えていた。

ガチャ

「疲れた…」

「お腹すいた…」

そう言う唯姉と律さん。

この人達、一体なにしにきたんだ…？

「我慢しろ」

「うわぁ…」

「すごいな」

別荘にあるスタジオは本格的なものだった。

機材も充実しており、

みたことのないいろいろなものも置いてあった。

「確かにすごいな。」

「あんなアンプ、使ったことないです」

さすがお嬢様、スケールが違う…

「漣！早く練習しようぜ！スネアが新品だ！！」

『げんきんな奴だ』人だな』

きつと、漣さんと僕は同じことを
考えていただろう。

そして、それぞれ楽器の準備を始めた。

「ん？梓、それなに？」

「私も気になる。」

梓のギターには、なにかの機械がくっついていた。

「これですか？ただのチューナーですけど？」

「唯姉知ってる？」

「ううん、わかんない」

梓がチューナーと言ったそれは、
唯姉も僕も見ることがなかった。
名前からして、きつとチューニングする時に
使う道具なのだろう。

「…誂も唯先輩も、どうやってチューニングしてるんですか？」

「どつってねえ、唯姉？」

「うん、適当に……」

そういつて、僕らはチューニングを適当にすませ、軽くギターを弾いてみる。

音は完璧だった。

それを見ていた梓はポカンとしていた。

「前も言ったけど、僕も唯姉も、絶対音感だからさ」

「はあ……誂はわかってるけど、唯先輩の話も本当だったんだ。

なんかすごい人かすごくくない人かわからない人だな……」

「まあ、唯姉は普段が普段だからね……」

「ぶう！なんかすごくバカにされてる気がする！」

「ごめんごめん唯姉……」

むくれる唯姉を宥めながら、僕らは演奏を合わせる。

久しぶりに合わせてみたんだが、

すごくいい感じだった。

普段はお茶ばかりしてる人たちなのに、いつ練習してるんだろ？

そんなことを考えながら演奏を続け

曲が終わった。

「今の、すごくいい感じでしたよね」

「僕もそう思いました。」

「ぴったりあったね」

満足のいく出来だったと思う

「律もちゃんとリズムキープできてたな。特訓でもしたのか？」

普段の律さんのドラムは、少し走り気味だ。

でも、今回はそんなことはなかった。

その理由は、

「…お腹がすいて、力がでない…」

「お腹すいてるから、無駄な力抜けたのね…」

「なるほど…」

そういうことだった。

「うう…もうご飯にしよう…飯食わせる!!」

律さんの切実な叫びが、スタジオ内に響き渡った。

「私も。」

ムギさんもお腹がすいてるようだった。

とりあえず夕食にすることにした。

外にでるともう夕方。

かれこれ4時間くらいはスタジオに籠っていた。

僕と梓、それに唯姉とムギさんは、夕食の買い物にでることになった。

「戻ったよ」

「ただいま。」

「りっちゃん、お肉だよ　お野菜だよ」

そう言っつて袋を高くあげる唯姉。

「待ってましたー！」

その時の律さんは、肉も野菜も生でも食べそうな勢이었다。

「少し我慢しろ。みんなで手分けしてやったらすぐできるから。」
そう言っつて、律さんを宥める澁さん。
これは、早く作っつてあげたほうがいいな。

「じゃあ僕、コンロの火みますね。」

「じゃあ私は、ご飯炊きますね」

最初に動いたのは、僕と梓だった。

「ほら、後輩が率先してがんばってるんだから。」

「うう…わかったよ。」

夕食はバーベキューだ。

野菜と肉は切ったものを串にさすだけ。

あとはご飯を炊いておにぎりを作るつといつことになつた。

これくらいなら、唯姉にでも簡単にできるだろう。

「うおおおお！！ひうおおおお！！！」

声のする方を見てみると、

大粒の涙を流しながら

玉ねぎを切る唯姉と律さんが

そこにいた。

「目が痛い〜」

「唯、大丈夫か…？」

「りっちゃん…」

「唯…」

「死ぬ時は、一緒だよ…」

「ああ…」

たかが玉ねぎなのだが、

この二人が関わると

なんでも壮大になる…

「誅、火は私が見てるから、梓を手伝ってやってくれ」

溥さんにそう言われたので、僕は梓のところに行った。
見ると梓は、おにぎりを作っていた。

「梓、手伝うよ。」

「あつ、誂、ありがと。」

他愛もないことを話しながら、
二人でおにぎりを握っていた。

「…誂って、意外と手、大きいんだね。」

「そうかな？」

僕が握ったおにぎりは、
梓のより一回りほど
大きかった。

「そつだよ。だつてほら？」

そついつて、梓は僕の手に、手を重ねてきた。
梓の手は、すごく小さかった。

僕は少し恥ずかしくなって、
すぐに手を離れた。

「ほら、先輩たち待ってるから、早く作るつ」

「うん…わかつた…」

手を離れた後の梓は、
少しだけ、寂しそうな顔をしていた。

それから、みんなで夕食を楽しみ、
その後はムギさんの提案で花火をすることに
なった。

花火も一通り楽しみ、

片付けをしようと

僕がバケツを持って立ち上がった時

「肝試しをやるう」

そう律さんが言った。

この合宿、絶対遊んでる時間のほうが長い。
僕は明日からのことが、少しだけ不安になった…

第16話 合宿 夜の部

「ふっ！？こ…高校生にもなつて、肝試しもないよなあ…」

「澪さん…手痛いんですけど…」

ここは別荘の近くの森の中。

僕と澪さんと梓の3人は、

懐中電灯片手に、そこを歩いていた。

こうなつた理由は10分くらい前、

肝試しをしようと言い出した律さんを澪さんが止めようとしたのだが、
律さんに、

「澪は、怖いのが苦手だもんね」

と煽られ、

ムキになつた澪さんがやると言い出したことから始まった。

きつと、後輩に格好悪いところを見せたくなかつたんだろう。

しかし、今澪さんは、僕の手を力一杯握り、

小刻みに震えていた。

澪さんがこういうのが苦手というのは知っていたけど、

ここまでとは…

「誅は平気なの…?」

そう言って、少し小さくなりながら
僕の手を握っている梓。

「うん、僕おばけとかそういうの信じないタイプだから」

ガザガザ

「「!？」

「？」

「…なんでしょうか？」

「き…きつと、り、り、律のしわざだよ…」

二人ともかなり怖がってるな…

音のするほうに明かりをやると…

人影がひとつ、僕らのほうに向かって歩いてきていた。

「うう…あぁ…」

それは、唸り声をあげながら、
ゆっくりと、

僕らのほうに近づいてきた。

「誅…あれって…」

「……………」

二人は、見てはいけないなにかを
見てしまったという顔をしていたが、
僕だけは違っていた。

『あれ？あの人、なんか見たことあるような……』

そんなことを思いまじまじ見ていると、

「み〴〵お〴〵ち〴〵ゃーん」

「きゃあああああああ……！」

「「！？」」

僕も梓もびっくりしたが、
どちらかというと、

透さんの叫び声に驚いていた。

「誅、あれなに！？」

「二人とも落ち着いて。」

澁さんは完全に放心状態になっていた。
梓も怖がっているが、意識はしっかりあった。

「ほら、梓見てみなよ、知ってる人だから…」

「せ、先生!？」

そこには、大きな鞆を持って
泥だらけになっている
軽音部顧問の姿があった。

「どうしたんですか？」

そう言い、梓が駆け寄った。

「ようやく会えた」

「あれ、さわちゃん先生!？どうしたの?ていうかなんでいるの?」
後からきた唯姉とムギさんも合流した。

「後から合流して、みんなを驚かせようと思ったんだけど…道に迷
って…」

「先生、驚かせようって目標は多分、達成できてますよ…」

後ろで魂が抜けかけている澁さんを見ながら、
僕はそう言った。

「澁ちゃん!大丈夫だから。ねえ澁ちゃん!？」

ムギさんの呼びかけにも、

澁さんは答えなかった。
ほんとに怖がりなんだな澁さんって…

とりあえず、先生を連れて
別荘に帰ることになった。

その後、忘れられた律さんを
僕が探しにいった…

その後に風呂に入ることになったんだが、
男の僕まで一緒に入るわけにはいかなかったので、
ぼくは一人だけ部屋に戻っていた。

お風呂場のほうは、なにやら騒がしかった…

第17話 風の音色 誅視点

お風呂に入った後、ぼくはムギさん頼んでいた物を取りに、スタジオに向かっていた。

「ごめんなさい、古いやつしかないけど…」

「いえいえ、十分ですよ。ありがとうございます。」

「でも、なにに使うの？」

「ちよっと、練習してる曲がありました…」

「そうなんだ。じゃあ、うまく演奏できるようになったら私も聞かせてね。」

「わかりました。じゃあムギさん、おやすみなさい」

「うん、おやすみなさい。」

ムギさんに頼んでいたものはアコギ。家から持っていくには荷物になるし、唯姉には見られたくないという理由で、持ってはこなかった。

僕は別荘のテラスにあるベンチに腰掛けた。

「さて、とりあえず最初は軽く…」

いつも弾いているギターとは、少し音が違っていた。同じ音はでないとは思っていたが、その音は、僕の探していたもう一つの音のイメージにすごく近かった。

「一応、あいつにも話しとくかな……」
僕は、携帯から電話をかけた。

「あつもしもし誠?」
「おう、誂か。どした?」

「この前言ったことなんだけど……一応渡しといた『あれ』練習しといて。多分、言った通りやると思っから……」
「OK。きつとみんなびつくりするぜ」

「そだね、まあ僕もがんばってみるから、誠も頼むね」
「任せとけ。じゃあ合宿がんばれよ。」
「うん、じゃあ、また」

—————

それからどれくらいだろうか?
1時間くらいは練習してた気がする。

パチパチ

拍手が聞こえ、後ろを振り返ってみると、
梓がそこに立っていた。
髪を下ろしている梓は、
いつもと比べて少し大人っぽく見えた

「はい、誄」

「うん、ありがとう」

冷えたオレンジジュースを渡しながら
梓は僕の隣に座った。

「…寝れないの？」

「ううん、寝てただけで、目覚めちゃって。風に当たろうつかと思
ったら、」

「ギターの音、聞こえてきたから…」
「そっか…」

ゆったりと吹く風が、
梓の髪をなびかせた。

「その曲、やっぱり聞いてると落ち着くね。」
「うん、もともと、この曲子守唄だからね。」

「そうだったんだ。」

「うん、僕たちがまだ小さかったころに、よく父さんが弾いてくれたんだ…」

「そうなんだ、なんかいいね。そういうの」「うん…」

とても静かだった。

聞こえる音は

風で草木が揺れる音。

それ以外はなにもなく、

ただ、ゆっくりと時間が過ぎていった。

「ねえ、もう一回、聞かせて？」

梓がそう言った。

「いいよ…」

そう言っつて僕はギターを弾き始めた。

静かだった空間に

ギターの音が響く。

草木の音と合わさり

とても優しいメロディが

僕ら二人を包んだ…

「…っと、やっぱり、寝ちゃったか…」
「すう…すう…」

肩にもたれる梓の顔を見ると、
とても幸せそうな顔をしていた。
この時間が、僕にとっても、すごく
心地よい時間だった。

僕はギターをベンチに置いて、
梓の頭を自分の膝の上においた。

「僕も一応男なのに…無防備だな…」

小さく独り言をつぶやきながら、
僕は優しく梓の顔を撫でた。

『やっぱり…僕は梓のこと…好きになってるのかな…』

僕の中で、自分の気持ちに対する
答えが少しだけ、見えた気がした…

第17話 風の音色 梓視点

「誄、もう寝ちゃったかなあ……」

仰向けに寝転がり、天井を見ながら、私は考えていた。

軽音部の先輩方は、遊んで疲れたせいかぐっすり眠っていた。

「なんか…眠れないな……」

私は、少し風に当たろうと、ベランダの方に歩いていた。

「あつこの曲……」

耳を澄ますと、ベランダの方から、聞き覚えのある曲が聞こえてきた。

それは、

とても暖かくて

優しい曲……

――

どれくらいかな？

30分は聞いていた。

弾いていた彼は、一度手を止めて
目を眺めていた。

冷蔵庫からジュースを2本取り、
ズボンのポケットにそれを入れた後、

パチパチ

私は誄に、小さく拍手を送った…

「はい、誄」

「うん、ありがとう」

私はジュースを誄に渡しながら、
隣に座った。

「…寝れないの？」

やっぱり、わかっちゃうのかな…

でも、誄のこと考えて寝れなかった…なんて私には言う勇氣はなかった。

「うん、寝てただけで、目覚めちゃって。風に当たろうかと思ったら、」

ギターの音、聞こえてきたから…」

「そっか…」

誄は、私に深く聞いてはこなかった…

気持ちのいい風が、

私の髪を撫でるように吹いた。

「その曲、やっぱり聞いてると落ち着くね。」

「うん、もともと、この曲子守唄だからね。」

「そうだったんだ。」

「うん、僕たちがまだ小さかったころに、よく父さんが弾いてくれたんだ…」

「そうなんだ、なんかいいね。そういうの」

「うん…」

そう言って話す誄の顔は、いつもとは違う、

少し大人びた表情だった。

私は、今の時間かとても幸せに思えた。

好きな人の隣で、

ただ座っているだけなのに、

心はすごく満たされて…

こんな時間が、いつまでも続けばいいのに…

「ねえ、もう一回、聞かせて？」

「いいよ…」

この曲は、やっぱりすごく落ち着く。

すごく優しくて、あつたかくて…

誄が弾いてるせいかな…？

すごくドキドキしてるのに、それ以上に安心する。

失いかけた意識の中で、私はこう思った。

誄のこと、やっぱり大好きなんだ

第18話 ノイズ

「誅、起きろ誅！」

…誰かが僕に声をかけている…

「…あつ、澪さん…おはようございます…」

「あつ、こら寝るな誅！」

「誅、膝のあたりをしてみる…」

「えっ…」

澪さんに言われた通り見てみると、
そこには、梓の頭が乗っかっていた。

梓の…頭…

梓の頭！？

「すみません、完全に目が覚めました…」

「よろしい、でござってこつなってるんだ？」

「えっと…てかなんで澪さんがここに？」

時計を見ると時間はまだ明け方4時半。

漣さんは早くに目が覚めて、
ベランダに来たらしいのだが、
見てみるとこの有様だったと話してくれた。

「なるほど…」

「で、なんでこんなところで寝てたんだ？しかも2人で
「まあ、簡単にいうと…」

僕は事情を説明した。

もちろん、膝枕に関しては少しはぐらかしたんだが…

「そういうことか…でも、なんかロマンチックだな…」

「そういうの。いい歌詞が出来るかも…」

「ちょ！？歌詞にするのだけは勘弁してくださいよ」

「あんまり大きな声出すと、梓が起きちゃうぞ。」

「…すいません」

とにかく僕は、このことはみんなには知られたくない…
特に唯姉には。

その気持ちをくんでくれたのか、
漣さんは梓を部屋に連れて行き、
誤解がないように話のつじつまを
合わせてくれる

と言ってくれた。

ありがとうございます、遷さん…

1日目こそ大変だった合宿も、2日目以降はいつも通りの軽音部。

練習もほどほどに…3泊4日の合宿は終了した。

そして、月日はめぐり、
今はもう文化祭直前。
時が立つのは早いものである。

そして、僕らはいま、楽器店の前にいる。
なぜこうなったかと言つと、
僕の発した一言から始まっていた…

「ねえ唯姉、ギターの音変じゃない？」
「やっぱりそう？私もそう思ってたんだ。」

「はあ、唯姉、ちょっとギター見せて」
「うん、いいよ〜」

唯姉のギターの音が、いつもと違っていた
ところに気が付いた僕は、唯姉のギターを見てみることにした。

「唯姉、1つ聞くけど、大事に使ってるよね？」
「もちろんだよ」

「じゃあ、ちゃんとメンテはしてるの？」
「メンテ？」

「はあ…唯姉、これ弦錆びてるよ。最後に交換したのいつ？」
「へ？弦って交換するものなの？」

「…なに？」

あなたは何年ギターやってるんですか…
その間ずっと弦変えてないなんて、
ある意味奇跡だと思うよ…

「梓、ちょっと見てみて。ほかに駄目なところない？」
「うん…ネックも反ってるじゃないですか！これだと
オクターブチューニングもめちゃくちゃですよ！？」
「オクタ…ネック…??」

唯姉の頭から煙がでていた。

「簡単にいったら、唯姉のギター調子悪いのは、それが原因。大事に使ってないからそうなるの!」

「ええ!? 大事にしてるよ!」

「どうやって?」

「えっとねえ…一緒に寝たり…服着せたり」

「大事にするポイントちがーう!!」

その時、ほかのメンバーが唯姉を見る目は、可哀想な人見るような目だった。

「で、唯姉これどうするの?」

「うーん、誅、なんとかならない?」

「ここまで来ると、僕にはどうすることもできないよ…」

「じゃあ、さわちゃん先生は?」

「…やっぱり、お店に頼んだほうがいいんじゃない?」

僕の直感だが、この先生…逃げたな。

「めんどくさいだけだろ!」

そういう律さんの後に、わざとらしい笑い声が聞こえた

『やっぱりだ…』

「らしいから、唯姉、楽器店行こう?」

「ええ、そこまでしなくても…」

「学祭近いのに、これじゃ練習にならないよ?」

「うん、わかった、行く」

とこつという感じで、今に至るわけだ。

「そういえば誅、さっき銀行寄ってたけど、なにか買いたいものもあるのか?」

湊さんがそう聞いてきた。

「いや、そういうわけじゃないですけど…唯姉の場合、なにがあるかわかりませんから一応…」

「…なるほど。」

「じゃあ、さっさと済ますよ、唯姉。」

「ほい」

「あつ、じゃあ私ここで待ってるから。」
澁さんが入り口で足を止めた。

「えっ、なんでですか？」
梓も立ち止まり、理由を聞いていた。

「私左利きだから、右利き用の楽器見ても悲しくなるだけだし……」

その気持ちは、僕も少しわかる気がする。

「あつでも澁、なんかレフティフェアやってるよ。」

「「えっ!?!」」

それを聞き、僕と澁さんは誰よりも早く
店の中に入っていった。

そして、いま目の前には、たくさんの楽器。
しかもすべて左利き用だ。

「ここは天国ですか!?!」
「間違いなく天国ですよ澁さん!?!」

「て、店員さん！ここにあるの全部ください！！」

「あつ、漣さん！僕の方も残しといてくださいよ！！」

知らない人がみたら、明らかに異常者である。

「こらこら！そこの二人、落ち着け。」

「誂も漣ちゃんも楽しそう」

「左利き用は少ないですから。先、行ってましようか？」

「うん」

僕らが楽器に夢中になっている間に梓と唯姉はメンテに、律さんとムギさんは、別の楽器を見に行ったようだ。

「漣さん、ちよつといいですか？」

「ごめんな誂、もうちよつとだけだから…」

「いや、そういうわけじゃなくて…この後、なにか予定ありますか？」

「いや、特にないけど、どうしたんだ？」

「ちよつとご相談したいことがあるんですけど、いいですか？」

「私に相談？別にいいけど。」

「ありがとうございます。それで、内容が内容なんで

他のメンバーには聞かれたくないの、

二人でどこか別の場所でお話したいんですが…」

「…わかった。じゃあここ出たら、一旦別れて、別のところで落ち合おう。」

「助かります。じゃあ僕ちよつと唯姉見てくるんで…」

「わかった。私はもう少し、この天国を満喫するよ〜」
「遷さんが、あちらの世界に行ってしまった。」

店を見渡して唯姉を探していると、

「るーーーーーいーーーーー!!」

探してる人がやってきた…

「…唯姉、これでしょ?」

そう言つて、僕はサイフから5千円を出した。

「すごい!なんでわかったの!？」

「なんとなくね…」

その時、律さんと梓は頷いており、ムギさんと店員さんは、なぜかホツとしていた。

「それじゃあ」

「そろそろ帰りますか?」

「ところで誅、澁先輩は？」

「澁さんなら、多分まだ…」

「はあ…呼んでくるわ…」

みんなが帰ろうと話している時

澁さんはまだ楽器を見ていた。

遠くで声は聞こえなかったが、

澁さんが駄々をこねているようだ。

子供のように座り込んで、その場から動こうとしなかった。

こんな澁さん、初めてみたかも。

そんな澁さんの首根っこを掴んで、

無理矢理こっちに連れてこようとする律さん。

しかし、少し強引すぎる気がした。

あのままだと、多分こけるのではないか？

そんなことを思っていると、

勢いよく澁さんが尻餅をついた…

あの雰囲気は少しヤバい気がする…

そう思った矢先、

「もついいよ…！」

大声で漣さんがそう言った。

店を出た僕たち。

しかし、空気は少しだけ重かった。

「この後どうする？」

それを察してか、ムギさんがこう切り出した。

「そうだな…よし！お茶でも飲んでくか？」

「またお茶ですか…」

「あつごめん！私この後和ちゃんと約束あるんだ」
唯姉、離脱

「うえー、じゃあ唯抜きで行くか。ほら漣、いくぞ」
律さんなりに気を使ったのだろう。
でも今は、タイミングが悪かった

「私も、今日は他で約束あるから、先帰るね。」

「あつ、僕も友達と約束があるんで、失礼します。」

そう言つて、僕ら二人は別々の方向に歩いていった。
それを見送る律さんの姿は、いつもより
少し小さく見えた…

第19話 不協和音 誅視点

『じゃあ、公園で待ってるから』

10分後、澪さんからメールがあった。

「すみません、待ちましたか？」

「ううん、そんなに待ってないから気にしなくて大丈夫だぞ」

「ありがとうございます。話はなにか食べながらでいいですか？お腹空いちちゃって…」

そう言うと、僕のお腹が大きな音を立てた。

「ふふっ、いいよ。じゃあ、あそこのファミレスでも行くか？」

「はい。ありがとうございます。」

そう言って、僕と澪さんは近くのファミレスに入った。

「じゃあ、これとこれ、あとこれもお願いします。」

「誅、細いのに以外と食べるんだな。」

「まあ、これでも一応男なんで…」

「確かにな、忘れたたよ。」

「澪さんそれ酷くないですか…?」

「ごめんごめん」

他愛もない話をしながら頼んだものを
食べ終えて、僕は一息ついていた。

「それで、相談っていうのはなんなんだ？」

「あつ、その話なんですけどね…」

「よっ、お二人さん 嘘までついてデートかい？」

「仲がよろしいこと〜」

そう言っつて、律さんが澪さんの隣に座っていた。

「律!?!なんでここに?」

「いや、たまたまねえ〜」

「律さん、どうもです。一人なんですか?」

「私もいるよ。へえ〜誂つて澪先輩とそういう関係だったんだ。」

「梓もいたんだね…偶然だね…」

見られてしまった。

「しっかし、漣と誅がねえ、漣はてつきり年上好みかと思ってたけど
案外この組み合わせもお似合いだな」

「いや、僕と漣さんはそういうんじゃない」

「ほんと、お似合いだと思いますよ。漣さん、誅のどついでとこ好きになっただんですか？」

梓の言葉は、深く心に突き刺さった…

「やめるよ二人とも！誅も困ってるだろ！？」

「あらあ？彼氏を庇うのかなあ漣ちゃん？」

「すごくラブラブなんだね。私にはわかるよ」

「ほんとラブラブですね。すごくうらやましいです。

誅は年上好きだったんだね。知らなかった」

「だから、僕と漣さんはそんなんじゃない？」

「そうだ、私と誅は…」

そんな僕たちの話なんか、

この二人は聞く耳を持たなかった…

「ねえ漣？どこまでいったの？もうキスとかしちゃった？

それよりもっとすごいことまで？」

「私も気になるな」。誂、教えてよ。キスとかもうしちゃったの？」

僕はすごくイライラしていた。

その理由は簡単だ。

でも、そのイライラをどこにぶつけていいのかわからなかった…

「なあ、漣？どこまでいったか教えるよ。私と漣の仲じゃんか」

「ねえ、誂も教えてよ。漣先輩のどこ好きになったの？」

ドンッ！！！！！

「そんなじゃないって言うてるだろ！！！！！！」

勢いよく机を叩いて、今まで出したことのない大きな声で、僕は怒鳴った。

「あ、あれ？誂、怒っちゃった？悪いなあ。そんなつもりはなかったんだけど…」

「誅、どうしちゃったの〜」

「たとえば僕が滲さんと付き合ってたとしても、律さんになんの関係があるって言うんですか!？」

梓になにか得することあるのか!? 僕が違ってたって信じないならそれでもいいです!!

二人が思いたいように思ってもらって結構です!!」

「……」
「……」

二人は僕の勢いに押されてか、黙ってしまった。

「お金はここに置いとくので、後で店員さんに払っててください。僕はもう、これ以上ここにいたくないので、失礼します……」
「あつ、おい! 誅……」

滲さんの呼びかけも無視して、僕は店を飛び出した。

気が付くと外は雨。

僕は雨の中、あの公園のベンチに腰掛けていた…

「…風邪引くぞ。」

「澪さん…」

そこには、澪さんがいた。

「…梓のことか？」

優しい澪さんの言葉に、

涙と共に、

僕の思いも零れた。

「僕は、梓のことが好きなんです…」

でも、梓に酷いことを言ってしまった…

やっと気づけた大事な気持ちなのに…

僕…これからどうしていいのか…」

「今は…なんにも言わなくていい…」

澪さんが優しく抱きしめてくれた。

その腕の中で、

小さな子供のように、

大声で泣いた…

泣き声は雨にかき消されたが、

その目には、

雨粒よりも大きな

涙が流れていた…

第19話 不協和音 梓視点

「で、なんで私たちがこんなことしてるんですか？」

私と律先輩は、今こっそり澪先輩の後をつけていた。

「いいじゃん、いいじゃん。どうせ梓も暇だろ？あつ、澪あその公園入ってたな…」

律先輩の様子は明らかに変だった。

なんだかんだ言って、

澪先輩に誘いを断られたのが、ショックだったのかもしれない。

「ほほう…そういふことか…」

「…誅？」

入ったのは近くの公園。

そこには、澪先輩。

そして、手を振りながら走ってくる

誅の姿があった。

「あんな嘘までついてデートかよ。澪も隅に置けないな。」

「…律先輩、あの二人、そのファミレス入るみたいですよ。」

「おっ！梓もノツてきたな。よし！入ってみるか？」
「…はい」

見たくなかったけど…
信じたくなかった…
だから…確かめたかった。

—————

「…なんか、楽しそうですね。」
「そりゃ、デートなんだから楽しいだろうさ…」

二人と少し離れた席に着いた私と律先輩。
遠くから見た二人は、
確かに、彼氏彼女のように見えた。

「…よし！突撃する。」
律先輩が席を立つ。

「先輩！私も行きます。」
黙って座っていることなんて
できなかつた…

「よっ、お二人さん 嘘までついてデートかい？
仲がよろしいことだ〜」

律先輩は、そう言って二人の間に割って入った。

「律！？なんでここに？」

「いや、たまたまねえ〜」

「律さん、どうもです。一人なんですか？」

「私もいるよ。へえ〜誂って漣先輩とそういう関係だったんだ。」

そう言つて、私も会話に割り込んだ。

「梓もいたんだね…偶然だね…」

そんな顔…しないでよ…

私の勘違いだね…誂？

「しつつかし、漣と誂がねえ〜漣はてつきり年上好みかと思ってたけど

案外この組み合わせもお似合いだな」

「いや、僕と漣さんはそういうんじゃない…」

でも…信じられない…

「ほんと、お似合いだと思いますよ。」

漣さん、誄のどういふところ好きになっただんですか？」

誄への気持ちが強すぎたせいかな…

自分でも吐き気がするほどの

憎たらしいセリフを

殴りつけるように吐き出していた。

こんなの…私じゃない…

「やめるよ二人とも！誄も困ってるだろ！？」

「あらあ？彼氏を庇うのかなあ漣ちゃん？すごくラブラブなんだね。私にはわかるよ〜」

律先輩の言葉。

誄の言葉。

もう、なにを信じたらいいかわからない…

「ほんとラブラブですね。すごくうらやましいです。

誄は年上好きだったんだね〜。知らなかった〜」

なにもわからないよ…

「だから、僕と漣さんはそんなんじゃない？？」

「そうだ、私と誄は…」

「ねえ漣？どこまでいったの？もうキスとかしちゃった？」

それよりもっとすごいことまで〜?」

もう、見ていられなかった。
言葉も、耳に届かなかった…

「私も気になるな〜。誂、教えてよ〜 キスとかもうしちゃったの?」

「なあ、漣?どこまでいったか教えるよ〜私と漣の仲じゃなか〜」
「ねあ、誂も教えてよ〜。漣先輩のどこ好きになったの〜?」

ドンッ!!!!!

「そんなじゃないって言ってるだろ!!!!!!!」

初めてだった…

誂がこんなに大きな声を出したのは…

「あ、あれ?誂、怒っちゃった?悪いなあ〜そんなつもりはなかったんだけど…」

「誂、どうしちゃったの〜」

「たとえ僕が漣さんと付き合ってたとしても、律さんになんの関係があるって言うんですか!?!」

梓になにか得することあるのか!?!僕が違うって言ったって信じ

ないならそれでもういいです!!

二人が思いたいように思ってもらって結構です!!」

なにも…言えなかった。

それは、律先輩も同じだった…

「お金はここに置いとくので、後で店員さんに払っと思ってください。

僕はもう、これ以上ここにいたくないので、失礼します…」

「あっ、おい! 誅…」

誅は足早に店を出て行った。

「いいのかよ? 彼氏ほったらかしにしてさ…」

「…バカ律! もういいよ! 好きに言ってる!」

後を追うように、湊先輩も店を出て行った。

「
……………」

重たい空気が、残された私たち二人を包んだ。

「はあ…なんかしらけたわ。梓、私先帰るから、会計頼んだぞ」
「……………」

律先輩も帰っていった。

「うっ…」

一人になった私は、
声を殺して泣いた。
もう、なにもわからなかった…

—————

店を出た帰り道。
涙は止まらなかった。

本当のことが分からない…

好きな人のことが分からない…

自分の気持ち分からない…

頭の中はぐちゃぐちゃで、
どうすればいいかわからなかった。

外は雨。

傘もささずに私は歩いた。

考えることもなく、ただフラフラと…

気が付くと、私はあの公園に足を向けていた。

誅との思い出の公園。

初めて名前で呼んでくれた。

私の大事な場所。

そこには…

雨の中、同じ傘の下で抱き合う、漣先輩と誅がいた

「そっか…やっぱりそうなんだ…」

すべて、わかった気がした。

私が求めた、本当のこと…

自分の好きな人の気持ち…

自分自身の気持ち…

私は、すべて理解した。

「…バカみたい、、」

失恋という、最悪の形で……

第20話 離反

「……………」

次の日の昼休み、僕は屋上にいた。
昨日のあの一件で、軽音部のみんなに合わせる顔がなかった…
ひとけのないこの場所で、
一人物思いにふけていた。

「こんなところにいたのか…」

振り返ると、漣さんがそこに立っていた。

「漣さん…」

「お昼ご飯、もう食べたのか？」

「いえ、なんか食欲なくて…」

「だろうと思ったよ…これ、よかったら食べて」

そう言って、漣さんは弁当を差し出してきた。

「放課後、練習あるんだから食べてないと。」

「ありがとうございます。でも…僕はもうあそこには…」

「…昨日の今日だもんな…私も行きにくいけど…」

ほかのメンバーには、迷惑かけれないだろ？」

「…そうですね。ありがとうございます。」

そう言って、僕は澪さんの弁当を受け取った。

「梓のこと、いつからなんだ？」

「わかりません。気が付いたら、好きになってました」

「そうか…誄は、どうしたいんだ。」

「好きって気持ちはあるんですけど、それも、どうしていいのか…」

「そうか…でもな誄。言わないと、伝わらないこともあるんだぞ。」

「…はい」

「自分がどうしたいのか。もう一度、ゆっくり考えてみるといいよ。」

そうすれば、きっと答えはでるよ」

「…そうしてみます。」

「うん がんばれよ。」

澪さんが、僕の頭を撫でた。

「はい！ランチタイム終了！昼間から熱いね〜お二人さん」

「律？」

「律さん…」

「これから学祭までは、昼休みも練習するから！」

「えっ…？」

「そうですか…」

僕は、律さんに連れられ、部室へと向かった。

部室には、部員全員集まっていた。
もちろん…梓も…

「いやあ、今年の学園祭は、溼どんな風に盛り上げてくれるのかな
去年はパンチラだったし、今年はへそだしとかかなあ？あ、それ
とも…」

「練習するんだろ！？」

溼さんが声を荒げる。

「「「ん？」「」」

その声に僕以外の3人が反応した。

「するよ」

「だったら…」

「…えい！」

律さんは、必要以上に澁さんにいたずらをしていた。練習する素振りには、まったくなかった。

「なんなんだよ!？」

そう言つて、澁さんは律さんの手を払った。

「あっそうそう、おすめのすっごい怖いホラー映画持ってきたんだけど…」

「律さん、練習しないなら、僕もつ行きますよ」

絶えかねて、僕がそう言った。

「私も、もう行くぞ!」

「ふ〜ん、行けば?」

「えっ?」

「悪かったよ、二人でイチャイチャしてるとこ邪魔してさ！」

そう言つて、律さんは僕と漣さんを見た。

「そんなこと言つてないだろ!!」

「えっ!? 誅、そうだったの!?」

「唯姉は黙つてて!!」

僕は抑えられなかった…

「!?!?…ごめん…」

見ると唯姉は泣きそうになっていた。

「…ごめん、唯姉。」

「うん…」

「みなさんもすいませんでした。時間も無いんで、練習…しましよ
う。」

「…そうだな…」

「うん…やるっか。」

その場なんとか静まり、僕らは練習することになった

みんなで合わせたのだが、妙にドラムが弱い…

そんなことを思っていると、漣さんがみんなの演奏を止めた。

「律、あのさ…ドラム走らないのはいいけど、パワー足りなくないか？」

みんなも同じことを思っていたようで、心配そうに律さんを見た。

「…律？」

湊さんの呼びかけに、律さんは反応しなかった。

「おい、律！」

「ああ、ごめん。なんか調子でないやゝまた放課後ねゝ」
そう言って、律さんは部室を出て行ってしまった。

「あつりっちゃん…」

「いいよ唯！」

呼びかけようとした唯姉を、
湊さんが止めた。

「…バカ律。」

その日の放課後、
律さんは部室に現れなかった…

第21話 調律 誅視点

「律先輩…来ませんね…」

あれから2日、律さんは部室にこなかった。
そして、今日も…

「どうしたんだろう…」
心配そうに言う唯姉。

「このまま…律先輩が戻ってこなかったら…」

「」「えっ」「」

「…」

「学園祭のライブ…どうなるんでしょう…?」
重い空気が、部室を包む。

「…練習しよう。」

湊さんはそう言った。

「えっ!? りっちゃんなしで…?」

「しかたないだろ…」

「ええ…」

唯姉の言いたいこともわかる。
でも、練習はしとかないと。
律さんのためにも…

「でも、律先輩…呼びに行かなくていいんですか？」

梓のその言葉に、僕は答えることができなかった…

「もしくは代わりを探すとかね。」
はっきりこう言ってくれたのは、うちの顧問だった。

「まあ、万ーのことも考えとくってことだけど」
「で、でも…」

「りっちゃんの代わりはいません！…！」

「ムギちゃん…」
「ムギさん…」

「待ってよ…りっちゃん来るの…待っていようよ…りっちゃん、
きつと来るから…」

見ていられなかった…
きつとこうなったのには、

少なくとも僕の責任もあるから…

「すみません、僕…今日は帰ります…」

みんなは、なにも言わなかった。
部室の扉に手をかけた時、

「誅、お前は…」

澪さんがそう言った。

「大丈夫ですよ。少し、用事を思い出したただけなんで。」
そう言っつて、澪さんに笑いかけた。

そして、僕は学校を出た。

用事というのは、もちろん律さんのことだ。

僕はそのまま律さんの家に向かった。

これはその時知ったんだが、どうやら律さんは、数日前から体調が悪かったらしく、
今日、学校にいる時から熱があったらしい。

僕は、そのお見舞いという形で、律さんの家にあげてもらった。

律さんの家族の方に教えられ、
律さんの部屋に向かった。

ガチャ

「ん、なんだ誂か…どうしたんだ？練習は？」

「だいぶ弱ってますね、律さん。大丈夫ですか？」

そういつて、律さんのベットの隣に腰かけた。

「うん…なんか風邪ひいたみたいだ。みんなは？」

「心配してますよ。具合悪いなら、そう言ってくださいよ…」

「お前…気づいてたんだろ？私が具合悪いの…」

「…なんとなくですけどね。」

そして僕は、本題を切り出した。

「この前は、すみませんでした。生意気なこと言って…」

あんなに怒るつもりはなかったんですけど…」

「ああ…気にすんな。私もふざけすぎた…ほんとにはわかってたんだ…
澪と誂が付き合っていないことぐらい…」

「……………」

「ただ…あの時はいろいろあって…素直になれなかったんだ…」

ごめんな誂。お前にも迷惑かけたな…」

「僕はいですから、漣さんに言ってあげてください。」

「へへっ、そうだな…」

「…僕、梓のことが好きなんですよ。」

「どうした突然？」

「まあ、聞いてください」

「…うん、それで？」

「そのことを、漣さんに相談しようと思ってあの日、僕が呼び出したんですよ。」

「そうだったのか…」

「他の人に話すと、ことが大きくなりそうだったんで、特に律さんとか」

「おいおい、それは言いすぎじゃないか…？」

「すみません。でも今回のことでわかりました。」

「ん？」

「漣さんにも言われたことですけど、言葉にしないと、伝わらない思いもあるんだなっということが…」

「…そっか。」

「…じゃあ、僕はそろそろ帰りますね」

「ん？もう帰るのか？」

少し寂しそうに、律さんは言った。

「いや、そろそろ来るかと思ひまして…」

部屋の外から、誰かが階段を上がる音が聞こえた。

「…そうだな。いろいろありがとな、誄」
「いえいえ、こちらこそ。」

扉を開けると、澁さんがそこにいた。

「やっぱりな。」
「そういうことです。」

僕は澁さんと入れ違いに階段を降りた。

「…そうだ誄。」
「なんですか?」

「梓とも、ちゃんと話しときなよ」
「わかっています」

最後にそう言って、僕は律さんの家をでた。

そして僕は、あの公園に向かった。

第21話 調律 梓視点

「梓、練習終わったら、ちょっと残ってくれないか？」

その日、透先輩にそう言われ、私は部室に残った。

「さて、なんで残ってもらったのか、理由はわかるな？」

「はい、この前のことですよね…？」

二人だけの部室。

正直、逃げ出したかった…

「…梓は、誅のこと好きか？」

わからなかった。

透先輩が、なんでそんなこと聞いてくるのか。

「……………」

「じゃあ、嫌いか？」

「わ、私は、誄のこと…好きです…でも、それは澪先輩も!？」
「そうだな、私も好きだよ。誄のことは」

「じゃあ、やっぱり…」

「でも、同じくらい梓のことも好きだ。私の好きは…そういう『好き』だよ」

付き合って…ないんだ…

「えっ?」

失恋したわけじゃ…ないんだ…

「私は、梓のことも誄のことも、妹と弟のように思ってる。そんな誄から相談したいことが

あるって言われたから二人でいたってだけの話なんだ。」

「…それじゃあ、」

「そう、梓の勘違いだ」

そうだったんだ…

「でも、私見ちゃったんです!その…誄と澪先輩が…抱き合ってる」と…」

「ああ、あれか。あれは私が誄を見つけて傘をかけてやって、ずぶ濡れだったから

タオルで拭いてただけだぞ。私も濡れないように傘の中に入ってたから、

遠くからだとそういう風に見えたのかもな。」

「そう…だったんだ…」

すごく、ホツとした。

「でもな梓、これだけは言っておくぞ」

「はい…」

「本当に誄のこと好きなら、誄のこと信じてやらないとだめだぞ」

「!?!」

そっだ。

私は、全然誄のことを信じていなかった
誄は、あんなに違うと言っていたのに…

「別に責めてるわけじゃないからな。ただ、あの時の誄の怒りは本物だ。

梓だって、自分の言ってることを最初から信じてもらえなかったら、腹が立つだろ？」

「そう…ですね…」

「あの時誄が怒ったのはそれが原因だ。でも、それがわかってるな

私からはもうなにもいうことはないよ。」

「はい…あの、」

「うん？」

「すみませんでした。ご迷惑をおかけして…」

「私はいいから、誂にはちゃんと謝っておくこと…わかった？」

「はい。」

「よし じゃあ私、寄るところあるからもう帰るな」

「はい、ありがとうございます。」

「…がんばれよ、梓」

「はい…／＼／」

ほんとに、ありがとうございます。

澪先輩。

私、誂のこと、信じます。

だって誂は、私が好きになった人だから…

第22話 決意の準備

もう暗くなり始めていた。
外は、少し肌寒かった。

僕は、自販機で買ったホットココアを
自分のポケットに入れた。

もちろん1本じゃない。

僕は、待ち人がいるであろう
公園に向かった。

「…寒いね」
「…そうだね」

「これ、飲みなよ」
「ありがとう…」

その公園に、梓はいた。

「なんで、ここに？」
「なんとなく…かな…」

「…そっか」

二人でならんで、ココアを飲んだ。

「…梓、この前はごめんね」

「…なんで誂が謝るのよ…なににも悪いことしてないのに。」

悪いのは…私のほうだよ…ごめんね…」

「うづん、僕も…怒鳴っちゃって、ごめん…」

「…」
「…」

沈黙が続いた。

それが長かったのか、

ほんの少しの時間だったのかわからない。

その沈黙を破ったのは、梓のほうだった。

「澪さんと律さん、大丈夫だよね…」

「大丈夫だよ。あの二人なら…」

「私、先輩たちがうらやましい」

「…どうして？」

「だって、信じあえてるじゃない…」

「そだね…」

「私たちも、あんな風になれるのかな…？」

「なれるさ…きつと」

「うん…」

僕は空を見上げた。

薄暗い空に光る

一つの星。

ココアの缶に口をつけたが、
中身はもうなかった。

「…帰ろっか？」

「そだね…」

今、告白するチャンスだったかもしれない。
でも、僕には一歩を踏み出す勇気がなかった。

帰り道、梓の顔を見ることはできなかった…

梓を家まで送り届けたあと、僕はもう一つの用事を片付けるためにある人の家の前まできていた。

インターホンを押すと、いつもの雰囲気とは違う軽音部顧問の姿があった。

「あら類くん、どうしたの？」

「はい、ちよっとお話があつて…」

先生の家の場所は、前持って他の先生方に聞いていた。

「寒いでしょ？いいから上がりなさい」

「すみません、失礼します。」

そういって、家にあげてくれた先生は暖かいコーヒーを出してくれた。

「で、話つてなんなの？」

「はい、実はこれなんですけど…」

そう言つて、僕は鞆から一枚の紙を取り出した。

「…学祭の講堂使用届けね、軽音部のじゃないみたいだけど…」

「はい、僕軽音部とは別に演奏しようと思ってるんです。あつ、でも軽音部としても演奏はしますよ。」

「それはいいんだけど…なんでまた？」

わからないのは当然だ。

だってこの話は、まだ誰にもしていないんだから…

「僕、思ったことを素直に言っつてことが苦手で、唯姉や憂姉には今まで感謝してるんですけど、素直にお礼言ったことがないんですよ…」

「…」

「それで、学祭っていう機会、演奏でなら素直に僕の気持ちを届けれそうな気がして…」

「なるほどね…でも、その報告だけにきたわけじゃないんでしょう？」

「はい。唯姉から聞きました。去年の学祭での軽音部の衣装は先生が作ったものだって…」

「それで、よかつたら僕たちの舞台衣装も用意してもらえないかなと思ひまして…」

「そういうこと。」

「はい、お願いできないでしょうか？」

先生の部屋は、布や小物が散乱していた。

きつと軽音部の衣装を作っているのだろう。
忙しい先生にお願いするのは、
心苦しかったが、僕はそう頼んだ。

「うーん、別にいいけど、タダで訳にはいかないわね」
「…と言いますと？」

「私の出す条件を一つ、無条件に聞いてもらおうわ。」
「…その条件というのは？」

「軽音部での演奏の時、私の用意した衣装を、文句を言わず着ると！どうする？」

「…その衣装って、どんな衣装なんですか…？」

聞くのは怖かったが、一応聞いておきたかった。

「それは当日までお楽しみよ 今言っちゃったら面白くないじゃないっ？」

「…わかりました。その条件受けます。」

「ふふっ、わかったわ。じゃあ張り切って衣装作らないとね」

その時の先生の笑顔に、少しだけ背筋がゾクつとした…

「で、誅くん僕たちって言ってたけど、何人分の衣装が必要なの？」

言っとくけど

軽音部の衣装優先だから、あんまり人数多いと用意できないわよ。

」

「必要なのは2着です。着るのは僕と背格好同じくらいの奴なんで、サイズは僕と同じで構いません。」

「なるほどね、それなら大丈夫そうね。デザインは私のほうですから、」

「どんな曲演奏するのか教えてくれない？」

「はい、演奏は二人ともアコギでします。」

「曲に歌詞はないので、インストになりますね…」

「なるほどね…わかったわ。なんとかかしてあげる。」

「ありがとうございます。あっ、それと…」

「まだなにかあるの？」

「衣装の色なんですけど、白と黒にしてもらいたんですけど、いいですか？」

「わかったわ。まかせておきなさい。」

「ありがとうございます。それじゃ、今日は失礼します。」

「うん。気をつけて帰るのよ。」

そういつて、僕は先生の家をでた。

その足で、今度は和さんの家に行った。

「…あら誅、どうしたの？こんな時間に」

時計はもう9時を回っていた。

「夜遅くにすみません。お願いしたいことがあって…」

「あら、誅が私に頼みごとなんて珍しいじゃない。」

「ははっ、それで、これなんですけど…」

「これって、講堂使用届けじゃない？あなた軽音部で演奏するんじゃないの？」

「軽音部でも演奏しますよ。これはまた別の所でのものです。」

「なるほどね、で、それを唯たちにバレないようにしたいから、わざわざ来たわけだ。」

「和さんにはお見通しでしたか…」

「何年あなたたちを見てきたと思ってるのよ。でも、なんで急に？」

「…姉ちゃんたちに、伝えたいことがあるんです。」

「…そっか。じゃあがんばりなさい。これは、私の方でなんとかしてあげるから。」

「すみません、おねがいします。」

やっぱり、和さんはすごいや。

僕のこと、お見通しなんだな。

そんなこと思っつて、帰ろうとした時、

「…誅」

和さんに呼び止められた。

「なんですか？」

「あなた、変わったわね。」

「そうですか？」

「そうよ、少なくともあの泣き虫だったころからはずつとね…」

「昔の話はやめてくださいよ〜」

「ふふっ、でも、今のあなたの顔は男の顔よ。恋でもしたのかしら？」

「そこは…ノーコメントですね。」

「そう…がんばりなさい。」

「…ありがとうございます。じゃあおやすみなさい」

「じゃあね。おやすみ。」

これで準備は整った。

あとは、舞台を成功させれるように練習するだけだ。

その日の夜は、いつもと違って

周りの景色が少し、

明るくみえた。

第23話 バンド名

「ぜんかーい！！学園祭に向けて、がんばるぞー！」

あの日から2日後、放課後の部室には、すっかり元気になった律さんがいた。

一時はどうなるかと思っただが、こうして今、元気な律さんを見るとそんな心配も必要なかったかなと思えてくる。

「「「「「おおー！」「「「「「

みんなが声をあげたその時、部室の扉が乱暴に開けられた。

「ちよつとー！！」

入ってきたのは和さんだった。焦っているようだが、なにがあったんだろっ？

「学祭の講堂使用届け、出さなかったの!？」

「「「「えっ?」「「「「

…和さん、今なんて言いましたか？

「…部長?」

「…そうだった。」

「「「「うえ!?!」「「「「

僕らは走って生徒会室に向かった。

僕は、この1年で一番体力を使った気がした…

「すみません!!!」

入るなり、律さんは生徒会長に深々と頭を下げた。

「締め切りは締め切りだから…」

「そこをなんとか!」

出さなかったのは僕らだから、

しかたないと言えはしかたない。

僕は、半分諦めていた…

「私からもお願いします！」

助け舟をだしてくれたのは、和さんだった。

「提出が遅れたのは、部長が風邪で欠席していたからですし…お願いします！」

そう言って、和さんも頭を下げた。

「まあ、真鍋さんがそこまで言うなら、今日いっぱい待ちましよう。」

和さんの力は偉大だ…

あなた、絶対次の生徒会長だよ、うん。

「あ、あなた…」

「ん？」

「ええ人やあ〜！」

そう言っただ律さんが和さんの手を握った。

「律さん、和さん困ってますよ?」

そういうまで、律さんは和さんの手を
離さなかった…

そして、部屋、

「ねえ、やっぱりピュアピュアよくない?」

「…ピュアピュア?」

突然、澁さんの口からでたその言葉の意味が、
僕にはよくわからなかった。

「あつ、あの時誂いなかったね。実は…」

梓が言うには、講堂使用届けを出すにあたり、バンド名を記入しなければならぬらしい。

軽音部として活動してため、バンド名はまだなく、それを決めて
いる最中…とのことだった。

バンド名…なかったんだ…

「なるほど…律さん、もうピュアピュアでいいんじゃないですか？
時間もありませんし…」

「却下！」

早っ！！

一瞬笑顔になった澪さんも、今は下を向いてしまっている。

「握り拳！は？」

「…演歌っばい。」

「じゃあ…靴の裏のガム。」

「今日踏んだんだな…」

「えっ！？なんでわかるの？」

そんな唯姉のアホアホ会話を聞きながら、
梓の後ろから先生を見ると、少しずつだが、
笑顔が引きつり始めていた。

「はあ、ムギ〜なんかいいのない？」

「うっん、充電期間とかどう？」

「うっ、縁起悪っ…」

「じゃあ、ポップコーンハネムーンとか。」

「だから、なんでそんな甘甘のばっかなんだよ!」

「ロケットえんぴつってよくない?」

「お前は黙っとけ!! 誅、なんかいいのスパッとさせてくれよ。」

「えっ!?! 僕ですか!?!」

恐る恐る先生を見ると、
爆発寸前だった。

ここではずしたら…
やられる!!

少し考えて、僕は紙に3文字だけ書いた。

「H T T? なんだこれ?」

「ほら、小さいころ、なんでも略して言う遊びとかあったじゃない
ですか?」

そんな感じで…」

「で、これはなにを略したんだ?」

律さんの質問に付け加えるように、
その文字の上に付け足して書いた。

「……っと。僕らって、こんな感じだと思ひまして……」
そう言つて、律さんに紙を渡した。

「ええと……放課後ティータイム、か」
「ダメですかね？」

「うん、バンド名でこれは少しダサイ気がするけど……」

「私たちらしいよな。」

「確かに。」

「そうだね。」

「そうですね。」

「じゃあ？」

「よし、これでいじう……！」

「」「」「」
「おお……！」

全員一致で、バンド名が決定した。

先生も落ち着いて、優雅に紅茶を飲んでいた。

学祭まであとわずかだ。

第24話 『俺』と『僕』

「…っと、今のいい感じだったね」

「そうだな、いやあやればできるもんだな 最初は不安だったけど」

今、僕は誠の家にいる。

軽音部での練習が終わったあと、

誠の家でもう一つの曲の練習もしていた。

「でも、いきなり学祭で演奏するなんて聞いた時は心臓飛び出るか
と思ったぞ。」

「はははっ、ごめんごめん」

誠に話をしたのは合宿が終わってすぐ。
ムギさんからあの時のギターも借りた。

それから、時間が合う時は、いつも二人で練習していた。

「でも、誠がOKしてくれるとは思わなかったよ。こつこつの苦手
だろ？」

「まあな。でも、お前の頼みだしな。それに…」

「それに？」

「こういう自分を変えたいって思って入学したんだから、努力はしないとな。」

「…誠はえらいよ。」

「よせやい。そんな大層なもんじゃないって。」

誠は、自分を変えようとかんばっている。
勇気をだして…

自分と比べると、誠がとても
大きくみえた。

「で、姉ちゃん達のために演奏するって言ってたけど、それだけじゃないんだろ？」

「えっ！？」

「伝えたい人、他にもいるんじゃないのか？」

「うん…。いる…。」

「へえ〜。もしかして中野か？」

見透かされた。

そんなにわかりやすいのかな？

僕って…

「そうだけど、なんでわかったんだ？」

「なんでって、中野といる時のお前、いつもと違うからなあ。もしかして、自分でも気づいてない？」

「え？いつも通りだと思うけど？」

「全然違うぞ！なんかこう…背伸びしてるというか…」

「なんというか…必死に釣り合うようにしてるって感じ。」

「そうかな？自分では自然なつもりなんだけど…」

「やっぱりさ、お前もおれと同じで、自分に自信ないんだと思う。」

「それはそうだけど…」

「そっぴり先輩が言ってたんだけど、自分のこと、僕から俺って言うようにしたら、」

「少し自分に自信ついたって言ってたぞ。」

「それはその人の気持ちの問題でしょ？」

「いや、以外とそう思うぞ。おれもその一人だ！」

「誠が僕！？似合わないな」

「なんか今、すごい失礼なこと言わなかったか？」

「嘘、嘘。ごめんごめん。」

誠とくだらない話をしながら、練習を続けた。

練習のかいあつてか、
完璧に近い仕上がりになつていた。
あとは、本番でへマをしなければ…

「…誅」

「なに、誠？」

「成功するといいな、学祭」
「…うん」

「お前の恋のほうもな」
「そうだね…」

気が付くともう9時。
僕は帰り支度は手早くすませ、
誠の家を出た。

なんて伝えればいいかはわからない。

でも、この気持ちは本物だ。
あとは勇気だけ。

こんなことで頭をモヤモヤさせるなんて、
自分で考えても女の子みたいだ。

でも、伝えるんだ。梓に…

大きな決意を胸に、
僕は家へと急いだ。

そして、時間は流れ、
ついにその日、
学祭当日はやってきた。

第25話 初めてのライブ

学祭当日。

今、僕は鉄板と格闘していた。

「誂くん、憂ちゃん、あと5人分追加お願いね！」

「了解」

うちのクラスの出し物は焼きそば屋。

料理が得意な憂姉が厨房担当だったんだが、

思った以上に人が入り、

もともとホール担当だった僕が、

助っ人で厨房に入っていた。

忙しすぎて、部室にいけない…

「誂、そろそろ限界だよね。」

「そだね、じゃあ後憂姉お願い！」

「うん！がんばってね！」

厨房は憂姉にまかせて、
僕は部屋へと走った。

「すみません、遅れました!!」

「あつ、遅いよ誄」

「ごめん唯姉、なかなか抜けれなくて…」

「言ってくれたら、私も手伝ったのに。」

「ごめん梓、そこまで気が回らなかった…」

時間はギリギリ。

他のメンバーを見ると、もう衣装を着ていた。
奥のほうからさわ子先生が、

「誄くん、来たなら早くいらっしやい!もう時間ないんだから…」

「…はい、いま行きます」

僕は覚悟を決めて、奥の部屋に入った。

そして5分後…

「誄、やっぱりかわいいよ」

「こうしてみると、女の子にしか見えないな。」

「ほんとね、かわいいわ。」

「誂、似合ってるぞ。」

「これは衣装を作ったかいたわ。」

見事に唯姉たちと同タイプの浴衣のような
衣装に身を包んでいた。

頭にはサイドポニテのウィッグ。

「誂…かわいい…」

まじまじ僕を見ながらそうつぶやいた梓。
恥ずかしいからあまりみないでほしい…

「なんか…スースーします…」

「我慢なさい！男の子でしょ！」

「男だから気になるんですよ。」

「………確かに」「」「」

というより、こんなコントをやってる場合ではなかった。

「そろそろ時間だ！みんな行くぞ！」

律さんの掛け声に、

「「「「「おおー!」「「「「「

全員が答える。

いよいよ始まる。

軽音部のライブが…

僕らは講堂の舞台袖で出番を待った。
少し緊張しているのか、落ち着かなかつた。
それは、梓も同じなようだった。

「梓、緊張してる?」

「うん、すごく。誅も?」

「うん、かなり」

口数も少なく、それからはお互い無言。
深呼吸をしていると、出番の合図がきた。

そして僕ら6人は、舞台にあがった。

「ええと、みなさんこんにちわ、放課後ティータイムです。」

唯姉のMCで始まった。

「今日は、お集まりいただき、ありがとうございます。
目標は武道館とか言っつて、私達軽音部は始まりました。」

律さんじゃないけど、唯姉のMCは不思議と安心できた。
緊張も少しだけ和らいだ。

「ギターを買うためにみんなバイトしたり、毎日部室でお茶を飲んでみんなと話したり、
ムギちゃんの別荘で合宿したり、入部してくれる1年生を探したり…。」

それはみんなも同じなのか、
さっきと比べて少し、
リラックスしてるように見えた。

「脇目も振らずに練習してきた〜なんてとても言えないけど
でもここが、今いるこの講堂が、私たちの武道館です!!」

唯姉のMCのおかげで盛り上がった。
唯姉…やっぱりすごいよ…

そしていよいよ、僕らの演奏が始まる。

「最後まで思いっきり歌います！」

僕にとって、初めてのライブ

「ふわふわ時間！」

僕は、思い切りギターを弾いた。

すごく気持ちよかった。

僕らの奏でる曲で、聞いているみんなが盛り上がる。
笑ってくれる。

それが嬉しくて、楽しくて、

気づいたら、自分でも出せないと思っていた音を

出せるようになっていた。

あの時のライブのような…

僕は思った。

軽音部に入ってたよかったです…

それから後のことは、あまりよく覚えていない。
ハイになっていたせいか、楽しいという思い以外は頭の中に残らなかった。

唯姉の歌声はとても暖かく、
とても楽しそうだった。

アンコールにも答えたが、
楽しい時間はあっという間だ。
気づいたら、ライブは終わっていた。

「「「お疲れー！」「」」

「「お疲れ様でした！」「」

ライブが終わった舞台袖、
ぼくらはみんなですう言った。

でも、僕にはまだある。
演奏すべき曲が。

伝えたい思いが。

「すいません、僕、ちょっと約束があるので先に行っても大丈夫ですか？」

「おう、誄。でも後でちゃんと部屋こいよな。」

「わかってますよ律さん。じゃ、またあとで」

そう言つて、僕は講堂を一度でた。

教室で衣装から制服に着替えて、向かった場所は誠のところ。

「よし、じゃあ行くか！」

「うん！行くこつ」

僕と誠は講堂に向かった。

自分の気持ちを伝えるために…

第26話 1から2へ

今、僕と誠のいるのは舞台袖。

ついさっきまでいた場所に、僕はまた来ていた。

「ほら、誂くん、頼まれてたものよ!」

そっとうさわ子先生から、衣装を渡された。

「いい感じですよ!ほんとにありがとうございます!」

ぼくは、深々と頭を下げた。

「いいのよ、気にしないで。最高の舞台にしてください!」

「...はい!」

衣装に着替え終わって誠を見ると、
えらく緊張していた。

「誠、大丈夫?」

「ああ、なんとか。いざ本番ってなると緊張して...」

「僕もさっきそうだった。でも、演奏始めたら気にならなくなるよ。」

「そんなもんかな？まあ、ここまできたんだし、もうどうにでもなるさ！」

時計を見ると、後5分ほどで僕らの番になる。

誠は深呼吸してみたり、手に字を書いて飲み込んだり、いろいろ試していた。

僕は、小さいころに聞いた父さんの言葉を思い出していた…

—————

「いいか誄、お前はまだ小さいからわかんないかもしれないけど、お前とお姉ちゃん達は違うんだ。」

「えっ？なにが違うの？」

「誄、お前は男の子だ。男の子は女の子を守らなきゃならない。わかるか？」

「うん、わかる。」

「よし、それに、家族も守らなきゃならない。」

「お父さんが守ってくれるからいい。」

「誄、お父さんとお母さんは、お前たちより長くは生きられない。

だから、お父さんたちがいなくなったらお前がお姉ちゃん達を守らなきゃならない。」

「いなくなっちゃおうの?」

「大丈夫、すぐじゃないさ。ずっと先のことだ。」

今はわからなくていい。わかる時はきつとくるぞ。」

「うん、わかった。」

「よし、いい子だ!」

父さん、今ならわかるよ。

その言葉の意味。

今まで守ってもらってばっかだったけど、
今度はぼくが守るんだ。

その気持ちを伝えたい。

想いを届けたい。

だから行くんだ。

あの舞台に。

「誄、出番だ。行くぞ！」
「あつ、うん！行くう！」

でもね、父さん…
守りたい人は、姉ちゃん達以外に
もう一人増えたんだ。

それは…

僕は、その子の名前を小さくつぶやき、
再び、その舞台にあがった。

第27話 送られた想い

時間まであとわずか。

そんな時に、僕は気づいた。

最大のポカに…。

「しまった…」

「どうした、誅？」

「このこと、結局誰にも言っていない…」

「ええ！？」

「自分のことではいっばいっばいだったから…」

「大丈夫かよ？」

演奏前にやってしまった…

「大丈夫よ。」

「先生…」

さわ子先生だった。

「あなたは最高の演奏にすることだけ、考えてなさい。
きつというわよ。大丈夫」

そう言つて、先生は僕にウィンクした。

「はい！行つて来ます！」

「しつかりね、二人とも。」

信じよう、先生の言葉を…

みんなのことを…

そして僕らはその場所に立った。

「みなさんこんにちわ、1年2組の平沢 誅です。」

思った以上に人はいて、びっくりはしたが、
そんなことは些細なことだった。

隣で誠はガチガチになってるけど…

「ど、どうも！1年3組の一之瀬 誠です！」

「今日は、お集まりいただきありがとうございます。」

講堂の中を見回すと、

そこにいた。

唯姉と憂姉が…

「僕ら…いや、僕は今日伝えたい思いがあって、この場所に立っています。」

軽音部のみんなが…

「でも、それは言葉では言い表せなくて…」

僕は小さく深呼吸した。

「その思いを、今日は音に乗せて届けたいと思います。

この曲は、まだ歌詞もついてないけど…

精一杯演奏するので、どうか聞いてください！」

拍手が飛び交った。

そんな中、僕と誠はギターを構えた。

「それじゃあ、聞いてください…」

そして、誠を見た。

「…1、2、3、4、」

そして、始まる。
僕の思いを届ける演奏が…

曲名はまだないけど、
これは父さんの、家族の曲だ。

子守唄というには少し激しいけど、
それは僕がアレンジしたからだ。

それはとても優しくくて、
暖かくて、
それでいて強さも持っている。

僕の目指しているものそのものだった。

伝わるかどうかはわからない。
でも、
それでも僕は弾いた。

自分の思う通りに、
自分の気持ちに正直に…

『唯姉、憂姉。聞こえてる？これからは、僕が二人の前を歩く。なにがあっても、二人を守る。』

もう、二人の後ろで小さくなってた僕じゃないんだ…』

そんな気持ちを託して…

それに…

『梓…。聞こえてるかな、この気持ちは、梓にも伝えたいことなんだよ。』

演奏はあっという間に終わった。

歌詞もない、出来損ないの曲。

そんな曲でも、

聞いている人たちは、拍手を惜しまなかった。

中には泣いている人もいた。

それを見ると、少し安心した。

ちゃんと、音に乗ってたんだ。

僕の気持ちが…

「…演奏はこれで終わりですが、最後にもう一つだけ、伝えたいこ

とがあります。」

でも、ちゃんと言わないと…

「思いの中には、口で言わなければ伝わらないものもあります。」

梓に…

「それを、伝えます…」

僕の想いを！

「一人の…女の子に…」

僕が梓を、好きだって想いを…

第27話 送られた想い（後書き）

誄の演奏した曲のイメージは

DEPPAPEPEのNight & Dayです。

曲を流しながら見てみると、

また雰囲気も変わってくるかもしれませんよ^^

第28話 届いた思い、伝わる想い

唯 side

「それほんとなのか！澗！」

「ああ、先生が言つてたから間違いない！」

「じゃあ、急がないと」

ライブが終わつたあとの部屋。

私たちはそこにいた。

今いるのは、りっちゃん、澗ちゃん、ムギちゃんと憂。

誄はなにか用事があるみたいで帰つてこないし、
あずにゃんはクラスの出し物のお手伝い。

ライブが終わつて外を歩いていたりっちゃんが
走つて戻つてきたのがきつかけ。

軽音部以外に講堂で演奏する人がいる。

そんな話を、どこかで聞いてきたらしい。

「お姉ちゃん、はやくしないと置いてかれるよ。」
「あっ！待ってよ〜憂、みんな〜」

少し遅れて私も走る。

ライブをすることはあっても、
ほかの人のライブを聞くことはなかったから
すぐドキドキした。

どんな人たちなんだろう？

講堂の扉を開けて中に入った。

「えっ？なんで？」

りっちゃんが声をあげた。

さっきまで私達が立っていた舞台。
その上には、誄が立っていた。

「今日は、お集まりいただきありがとうございます。」

そう言って会場をみる誄と目があった。

「おい、私なにも聞いてないぞ！」

「私もなにも聞いてない……」

「わたしも」

みんな知らなかったんだ。

私も憂も、もちろん知らなかった。

知ってたら、絶対みんなに話すもん。

「僕ら……いや、僕は今日伝えたい思いがあつてこの場所に立っています。」

伝えたいこと？

誰に？

どんな思い？

「でも、それは言葉では言い表せなくて……」

そこに立つ誅の姿、雰囲気はいつもと違って、

「その思いを、今日は音に乗せて届けたいと思います。この曲は、まだ歌詞もついてないけど……」

精一杯演奏するので、どうか聞いてくださいー！」

目を…離せなかった…

「それじゃあ、聞いてください…」

始まる。

「…1、2、3、4、」

講堂に響くギターの音。

ふんわり暖かい、アコギの音。

その曲は、私や憂にとっては、懐かしい曲だった。

「お姉ちゃん、この曲…」

「うん、お父さんの曲…」

まだ小さかったころ、

お父さんがいつも弾いてくれた子守唄。

テンポは少し違うけど、

とても懐かしい曲…

でも、弾いてるのはお父さんじゃない。
弾いているのは、誅だった。

そっか…

伝えたい人って、私たちだったんだ。

そう思っただけ見た誅の姿は、

とても大きく見えた。

小さかったころの誅は、一番の泣き虫だったよね。

いつもクラスの男の子にいじめられてて、

その度に、私や憂に泣きついてきたよね。

お姉ちゃん、助けてって…

いつも私たちの後ろにくっついてきて…

そんな甘えん坊で泣き虫だったのに、

今の誅は…

「憂…」

「なに？お姉ちゃん。」

「誂、なんかおっきいね」

「そうだね……」

「……私たちが思ってる以上に、誂はおっきくなってたんだね。」

「うん……なんか……」

「うん……」

「……お父さんみたい。」

そう言っつて顔を見合わせて笑った憂の瞳には、
薄っすら涙が見えた。

「なんか、いい曲だな。」

「……だな」

「すごく、優しい音……」

「うん……」

「そうだね……」

誂、ありがとうね。

気持ち、ちゃんと伝わったよ。

軽音部のみんなに、

そして、私たちにも。

ほんとに、ありがとう…

梓 side

模擬店のほうも落ち着いて、教室から出た私は、足早に部室に向かった。

今階段を上っているけど…静かだ。

「やっぱりいない…先輩たちどこいったんだろ？」

部室に人はいなかった。

代わりにあったのは一枚の置手紙。

『ライブがあるらしいから、講堂に行ってください。』

ライブという単語に反応したのか、
私はすぐに講堂に向かった。

軽音部のほかにもあったんだ…
間に合うかな…

ほとんどの生徒が講堂に流れているせいか、
人とはあまり会わなかった。

急いで講堂に向かって扉を開けると、
演奏がちょうど終わったところだったようだ。

いい演奏だったんだろう。

周りを見ると、雰囲気にもまれて
泣いている生徒が何人かいた。

演奏したのが誰か、気になった。

「…演奏はこれで終わりですが、最後にもう1つだけ伝えたいこと
があります。」

見るまでもなかった。

その声は、私がよく知っている声。

そして、私の大好きな人の声だった。

「誅…！」

「思いの中には、口で言わなければ伝わらないものもあります。」

私はなにも知らなかった。

知ってたら、絶対聞きに来てたのに…

「それを、伝えます…」

伝えるってなにを？

だれに？

「一人の…女の子に…」

私の心の声に反応したように

そう言った誅。

女の子に想いを伝える。

大勢の前で、誅は確かにそう言った。

講堂内はどよめいた。

でも、きっとそれ以上に、

私の心がどよめいた。

期待と恐怖が入り混じった感情。
最高と最悪のせめぎ合い。

いろいろな感情が頭の中を回るなかで、

私は静かに、

次の言葉を待った…

第29話 スタート

誅side

講堂を静かで、
僕の声をよく通った。

この場所にいるなら、絶対に聞こえる。

「…同じクラスの、中野 梓さん。ここにいるなら、前まで出てきてくれませんか？」

その場にいる全員が回りを見回しながら、
口々になにか言っていた。

そんな中、こっちに向かってくる

足音が一つ。

彼女は講堂の真ん中を、

ゆっくりと歩いてきた。

そして、

今は僕の目の前にいる。

周りの人たちは動きを止めて、
じっと僕らのほうを見ていた。

「今思えば、梓を軽音部に誘った時から、だったのかもね。」

「…」

「僕は、器用な人間じゃないから、ロマンチックなことは言えないけど…」

梓は小さく頷いた。

「僕は…僕は…」

情けないな…

言つと心に誓ってたのに、

本人を目の前にすると、すぐドキドキして、

すごく怖くて…

いろいろな感情が頭の中にあって、

一番大事な言葉が、出てこない。

そんな時、僕の胸に手を置いて、

「ちゃんと聞くから、聞かせて…」

梓は小さくそう言った。

ありがとう、梓

梓のためにも
自分のためにも

伝えるんだ。
この想いを…

「ぼ…おれは、梓のことが好きだ！おれと付き合ってくれないか！
？」

僕は梓を見た。

梓は、目に涙をためて、

でも、満面の笑顔を浮かべて、

「うん!!」

そう答えてくれた

梓 side

「…同じクラスの、中野 梓さん。ここにいるなら、前まで出てきてくれませんか？」

なにも考ええなかった。

嬉しいという気持ちも、

びっくりしたという気持ちもなく、

ただ、誄を見つめた。

周りの声なんて、なにも聞こえなかった

私の足は、勝手に動いて、

気づいたら、誅の前に立っていた。

「今思えば、梓を軽音部に誘った時から、だったのかもね。」

知らなかったわけじゃない。

わからなかったわけでもない。

ただ、信じなかった。

私が一番望んでたこと。

でも、一番私が諦めてたこと。

難しく考えすぎちゃったな…

すごく、簡単なことだったのに…

「僕は、器用な人間じゃないから、ロマンチックなことは言えないけど…」

そんなことないよ。

私のために、がんばってくれてる。

こんな大勢の前で、伝えようとしてくれてる。

それだけで、私は十分、ロマンチックだと思った。

「僕は…僕は…」

これは、私のわがままなのかな。

早く、聞きたい。

誄の声で、誄の言葉で、

思いで体が勝手に動く。

誄の胸に手をあてている。

「ちゃんと聞くから、聞かせて…」

そう言って、誄を見た。

ごめんね、誄。

でも、聞きたい。

私が待ち望んだ言葉を。

「ぼ…おれは、梓のことが好きだ！おれと付き合ってくれないか！
？」

やっと聞けた。

やっと届いた。

泣きそうになった。
でも、嬉しくても泣かない。
泣き顔なんて、もう見せない。

「うん!!」

涙の代わりに、
私は精一杯の笑顔で
誄に答えた。

おれの思いは、ちゃんと梓に届いた。

笑う声、からかう声、祝福してくれる声。
いろんな声が聞こえたけど、
今はそんなこと、気にならなかった。

おれはそつと、
梓を抱きしめた。

「やっと、届いた…」

おれの耳元で、梓が小さくそう言った。

「おれも、梓に届いてよかった。」

「うん！私、今すごい幸せ…」

「今以上に幸せにする、大切にするよ」

「うん！私も、誄が好き！」

「おれも好きだよ、梓」

人目なんて関係なかった。

でもここは講堂。

いつまでもこうしてるわけにはいかなかった。

少し名残惜しかったが、

おれは梓から離れた。

「誄、ありがとう」

離れ際、梓はそう言って
頬に軽くキスをした。

恥ずかしかったけど、悪くない気持ちだった。

慌しくなった講堂を二人ででると、

入り口には、軽音部メンバーと憂姉がいた。

「誄！お前、男見せたな！」

「おめでとう、誄、梓」

「かっこよかったよ、誄くん」

祝福してくれた、律さん、澪さん、ムギさん。

そして、

「唯姉、憂姉……」

「ありがとう、誄」

「すごく、感動したよ」

「おれの気持ち、ちゃんと伝わったかな？」

「伝わったよ、いっぱい」

「誄、おつきくなったんだね……」

「姉ちゃんたちが思ってるよりはね」

「「うん！」」

今までおれの前を歩いてきた姉ちゃん達。
これからは、おれが姉ちゃん達の前を歩く。

「誅、いこ置いてかれるよ」

「うん、そうだね」

おれの大事な人と
二人で…

最終話 二人だけの子守唄

片付けを終わったおれは、一人部室に向かった。

「あれ、梓ひとりなの？」

「うん、先輩たち、用事あるから帰るって」

気、使わせちゃったかな

「そっか、多分嘘だろうけどね」

「そだね、でも…私はそれに甘える」

そう言っつて、梓が抱きついてきた。

「梓!？」

「いや〜?」

「嫌じゃないけど…いきなりだったから」

「今まで我慢してきたんだもん。もう我慢できないよ。」

「そっか、うん」

優しく髪を撫でると、梓は幸せそうな顔を見せた。

これが始めてじゃないんだけど、

なんか新鮮だった。

「ほんとに、夢じゃないんだよね。」

「うん、どうだろね。」

「もう！誄のいじわる！」

「ふふっ、ごめんごめん」

今の時間が、いつまでも続けばいいのに
そう思った。

「じゃあ、私もいじわるするもん」

「してみなよ」

そういうと、梓がまた頬にキスをしてきた。

おれにとっては、いじわるでもなんでもなかった。

「ふふっ、3回目」

状況が変わった…

えっ？3回目？

「梓、回数間違えてない？」

「間違えてないよ」

「2回目でしょ？いまの」

「ううん 実はね、誄の家に遊びにいった時、寝てる誄に最初の1回、してたんだ」

そんなことしてたのか！

キスされるのはいいけど、

その話を聞くと、

なんか恥ずかしくて、

顔が熱くなった。

確かに、これはいじわるだ…

「誄、顔赤いよ」

「言つな！／＼／＼」

「ちなみに、どこにしたと思つ？」

「ほっぺでしょ？」

「ううん、く・ち・び・る」

「！？／＼／＼」

なんか、梓がすごいSになってる気がする…

「嘘でしょ!？」

「うん、嘘」

「絶対、遊んでるでしょ？」

「なんか、楽しくて」

このままだと、絶対尻にしかれる。

「梓…」

「なに、誄？」

「こっちみて…」

「る、誄!？ちよつと、えっ!？」

「黙って…」

「うん…／＼／」

じっと梓の顔を見つめた。

少し赤くなった頬に手をあてて
ゆっくり顔を近づける。

おれは、優しく梓にキスをした。

頬じゃなくて、唇に…

「んっ…／＼／」

初めてでドキドキした。

梓の息が鼻にあたって、すこしこそばかった。

その時間が長かったのか、短かったのかはわからない。
でも、おれにとっては一瞬だった。

閉じた目をゆっくり開きながら、

梓の唇から離れた。

「誅、いきなりすぎる…／＼／」

「ごめん、でも我慢できなくて／＼／」

「うん…／＼／」

「いや…だった？」

「ううん、嬉しかった／＼／」

だれもいない部室。
とても静かだった。

「ねえ…誅…」

「なに、梓…」

「もう一回…キス…して／＼」
「うん…」

ゆっくり進む時間の中で、
ここだけが、とても早く時間がたってるんじゃないか。
と、思うくらいに、時計の針は進んでいた。

「そういえば、なんで自分の呼び方、おれになったの？」

おれの肩に頭を置いて、梓が聞いてきた。

「自分に自信なかったんだけど、誠がこうすれば
少しだけ自信つくかもって教えてくれたからかな。」

「そうなんだ。誂がおれって言ってるの聞くと、なんか新鮮だな」
「自分でも変に思うよ」

「ふふっ、無理に変えなくてもよかったのに…」
「でも、おかげで梓に気持ち、伝えることできたから」

「…ばか／＼」

そう言って下を向いた梓。
掴んでいた腕に少し力をいれて、
さっきよりもきつく抱きついてきた。

「そういえば、演奏どうだった？」

「ごめん、私終わった時に中に入ったから、演奏聞いてないんだ。」

「そうだったんだ。」

「ごめんね。聞きたかったけど…」

残念そうに梓が言った。

「じゃあ、今から弾こうか。あの曲」

「いいの？」

「うん、梓だけのためにね。」

「うん…聞かせて…」

ギターを手に取り、おれは始めた。

梓のためだけの演奏を…

家に来た時も同じ曲を弾いたけど、
今とは全然違った。

曲も、おれの心も

気持ちが変われば音だって変わる。

いまの音は、いつも以上に優しい音のような気がした。

「…いつもこうなるんだな」

夕焼けに照らせられた部屋。

梓は眠ってしまった。

いつも途中で寝ちゃうんだよな

「ちょっとくらいなら、いいかな…」

幸せそうな梓の寝顔を見ながら、

「…いつかのお返し、な」

そう独り言をいいながら

梓の頬に

優しくキスをした。

最終話 二人だけの子守唄（後書き）

これで、とりあえずこの作品は終了になります。

少し短いですが、この続きを書くかは検討中です。

いただいた感想を見ながら、決めていきたいと思います。

短い間でしたが、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2663t/>

けいおん！ 男の娘の苦勞

2011年5月30日05時09分発行